

Girls und Heiligenschein

ケツのインゴット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2500年代の生き方

もしくはHALOにガルパンキャラをつつこんでみる思考実験

※戦車はロクに出ません。タイトルにも書いてないしね

目次

グラントでも分かる！世界観説明 With Q&A	1
SECTION I 《SPARTAN―II》	
ある日、ある戦場で	4
第一話 姉妹	9
第二話 海軍規約45812条	12
第三話 Military Reservation 0147	7
8―B	15
第四話 チームメイト	18
第五話 小さな暴君	25
第六話 雪の進軍	30
閑話一 地吹雪	38
第七話 兄弟	46
第八話 別離	52
第九話 超人	56
第十話 「敵」	60
第十一話 雷神のいかずち	65
第十二話 CQB	70
第十三話 英雄	80
第十四話 守れない約束	88

グラントでも分かる！世界観説明 With Q & A

未来。増えすぎた人口は人類を宇宙に進出させることを強いた。しかし人類に待っていたのは、さらなる試練であった。

各星系に広がる植民地。

その植民地を中間搾取する政府。

それに対し不満を募らせる反乱分子たち。

2つの組織は何度もぶつかり合い、その余波で無辜の市民は大量に死んでゆく。

そんな中、国連宇宙司令部 UNSCの情報部である海軍情報局 ONIに所属するキャサリン・

ハルゼイ博士が一つの計画を提唱する。

“SPARTAN―II計画”である。

その計画の内容とは、遺伝子的に優れた6歳程度の男女を拉致。教育／強化を施し、対反乱軍への切り札を作ることであった。

2517年、その計画の候補者となったある少女から物語は始まる。

よくない質問

Q：HALOって何？

A：Xboxのゲーム。すごい売れてる

Q：どうしてガルパン？

A：アニメと映画見たら超面白かったから

Q：UNSCって？

A：要は地球軍。

Q：わざわざ拉致することなくね？クローンとかあるっしょ

A：クローンはあるけど欠陥ある。寿命がすごい短いし知能や感覚も低い。よって兵士には使えない。ちなみに拉致つた子供はクローンとすり替えてます。鬼畜。

Q：そこまでしなくてもよくね？

A：反乱軍はこのまま放置すると二十億人以上を殺すと試算された。最早手段は選べないのだ。

Q：とは言っても普通の特殊部隊とかがどうにかするでしょ。

A：あまりに範囲が拡大してしまい、対応できない。それに政府の対応に怒りを持つ兵士は多く、反乱軍シンパは軍上層部にすら存在する。

Q：SPARTAN―IIって事はIもあるの？

A：ある。ただし対象は子供ではなく成人した軍人。コストに見合う結果では無かった。

正式名称はORION。

Q：ONIIって？

A：鬼。読んで字のごとく。一応「Office of Naval Intelligence」が正式な名称。

Q：拉致されたって事は、UNSCとかいうのに復讐する話だな！

A：んなわけない。第一そんなことしても意味ないし、死人が増えるだけ。

Q：じゃあ軍を内部から変えるとか

A：最強とはいえ一兵士。兵士にできることは、戦うことだけだ。

Q：ガルパンキャラ死ぬの？

A：HALO・ガルパンどちらのキャラも分け隔てなく接します。そういう事です。

Q：ホントに戦車でないの？

A：後半にIV号ぐらいは出します。HALO世界にも戦車はあるけど一人乗り。

Q：なんで書いた？

A：家族を人質に取られた。

Q：このQ&Aって何？

A : 文字数稼ぎ。

SECTION 1 《SPARTAN―II》

ある日、ある戦場で

「畜生！」

ウォレス・ガルスキー二等軍曹は今日何度目になるかわからない悪態をついた。

「おいリリース！弾薬はあとのくらい残ってる！」

「ライフルのマガジンが5、グレネードが3であります、サー」

「くそつ、あいつら数が多すぎるぜ！こちとら海兵隊員が3人しかいねえつてのによ！」

マイケルソン伍長が毒づく。

「マイケルソン、喋る前に撃て！」ウォレスが怒鳴る「ブーツをケツにねじ込まれてえのか！」

「そう言われましてもね、こう数が多いんじやあ愚痴のひとつも言いたくなるつてもんですよ！」

ウォレス率いる海兵隊はリカツソ基地の陥落を知り、後方の検問所まで後退。

しかし敵の執拗な追撃を受け、20人いた海兵隊は今やたったの3人。

さらに無線機は先ほど通信兵ごと天に召された。COMリンクも使えない。

絶望的な状況だが、人類にとってこの程度は最早“ありきたりな”絶望でもあった。

「サー、もうほとんど弾がありません」

「そうか…」ウォレスはうなずき、ため息をついた。

グレネードが底をつき、弾薬もアサルトライフルに装填された分まで最後となってしまった。

「もうこれ以上は…」

「いやだ…俺はあきらめねえぞ！」

伍長はもはや泣き叫びながらライフルを抱え、身を乗り出した。

「よせ！」

プラズマの着弾音、そして肉と骨が焦げた匂い：マイケルソンが撃たれたのだ。

ウォレスは倒れた伍長を素早く引きずり戻し、怪我の度合いを確認した。

左腕があつた場所は溶けたボディーマーと半ば溶け合っている。プラズマにより出血こそ少ないものの、彼は被弾のショックによりひどく衰弱していた。

早く病院に搬送しなければ間違いなく死ぬ。そういう類の傷だった。気絶しているのが唯一の救いか。

バイオフォームで応急処置を試みようとするものの、あの撤退戦のとき医療兵の死体ごと置いてきたことを思い出す。

あの時危険を冒してでも取りにいったら…：そう意味のないことを考える。

そしてもつとまずいことに、伍長が戦線を離脱した影響で敵部隊が一気に検問所に押し寄せてきたのだ。

気づいた時には青白く光る二又の剣を持つ敵の、4つに割れた顎がはつきりと見えるほど接近されていた。

「ここまでか…」

せめてハヴオック戦術核があればあの糞忌々しい顎割れ野郎どもを吹っ飛ばせたかもしれないが…

そう負け惜しみを思いつつ、ウォレスが目を閉じて運命を受け入れようとしたその瞬間。

「グアア！」

今まさにウォレスに切りかかろうとしていた敵は、鋭い銃声とともに

に左胸に拳大の穴をあけて絶命していた。

突然の出来事に紫色の返り血を浴びたウォレスも他の敵もあつげにとられ、銃声のした方向を見た。

いつの間にか真上を飛行している黒く塗装されたペリカン輸送機…そのハッチからだ。

スナイパーライフルを構えた黒いアーマーとヘルメットにオレンジのバイザー…

『遅くなつてすまない。救援要請を受け取つてここに来た。後は我々SPARTANに任せてくれ』

近接通信で命の恩人が呼びかけてきた。

あの通信兵だ！天に召される前にしっかり仕事をこなしていくれたのだ！

「は…はははーやったぞー！」

ウォレスは恋人にも囁いたことのない睦言を今は天にいる通信兵に言いたくなった。

もう安心だ。後は彼女らに任せておけばいい。

彼女らは3人ほどの人数の様だが、あの大部隊をいとも簡単に一掃してしまうだろう。

なぜなら彼女たちはSPARTANなのだから！

・

・

ほとんど戦闘は終わった。当然、あちらの全滅という形だ。

噂には聞いていたが、味方から見ても寒気がするほどの戦闘力だった。

まず隊長と思われるスパルタンがペリカンから飛び降り、敵の射撃を避けつつ敵後方に突撃。

他のスパルタン達は隊長をペリカンから援護しながら「ついでに」検問所付近の敵を排除し海兵隊の安全を確保。

その間に敵後方に到達した隊長は敵戦車レイスを奪取し大暴れしていた。

そしてそちらに敵の注意が向いている隙に、他のスパルタン達はペリカンから降下し背後から急襲。部隊長やマークスマンを優先して排除し、敵部隊を混乱させた。

恐慌状態の敵を容赦なくペリカンのミサイルと奪ったレイスのプラズマ砲撃で攻撃し、そのまま敵は壊滅した。

まるでルーチンワークのような安定感。おそらく流れ作業になってしまうほど、同じやり方を何度もやってきたのだろう。

ウォレスはまだ自分が生きている喜び、戦闘の後の高揚感、そしてスパルタンの戦いぶりを見て感じた恐怖に似た感覚。

それらが交ぜになり、しばらくの間放心状態となっていた。

「無事なようで安心した」あのすさまじい戦いの後とは思えないほどの平坦な声により、ウォレスは我に返った。

「ペリカンに乗ってくれ、そちらの彼を速やかに後方へ移送しなくてはならない」

「あ、ああ。そうだな。はやいとこマイケルソンを病院につれてかねえと…バイオフィームを持ってるか？」

黒いペリカンに乗り込みつつ、ウォレスはスパルタンの隊長に尋ねた。

「無論ある。多めに載せているから、あなたたちも使うといい」

「すまない」ウォレスはらしくもなく感極まった。「それとありがとう、スパルタン」

「気にしないで欲しい。そのために私たちはいるのだから。…ブラック2、出せ」

『了解しました、ブラックリーダー』

ペリカンが地面を離れ始め、VTOLの独特な浮遊感を感じながら、ウォレスはバイオフィームをマイケルソンの傷口に噴きつける。

少しして、マイケルソンは安らかな寝息を立て始めた。容態が良く

なつたようだ。

ここにきて、ウオレスはようやく一息つくことができた。

先の見えない戦いだが、こちらにはSPARTANがいる。それに俺はまだまだくたばらないぞ。

煙草に火を着けながらウオレスはそう決意を新たにすのだった。

第一話 姉妹

「お姉ちゃん、こつちこつちー！」

「ああ今いくよ、みほ」

元気いっぱいな四歳の妹のみほ、それに連れまわされる落ち着いた七歳の姉のみほ。

それは地球から最も遠い農耕植民地惑星ハーベスト、その一都市グラデシエウム市にある大きな屋敷の近所に住む人達にとって、よく見る光景だ。

「前を見て走って、みほ」まほは少し低く作った声でつぶける「また転んでも知らないぞ」

「大丈夫だって！そんな何回も転ばないもん」

みほはやんちゃで、走り回るのが大好きな子供だった。それとは対照的にまほは物静かであり多くは語らない性格だった。

物心つく前に父は亡くなり、母は父の仕事の引継ぎで忙しく、手伝いの人は財産管理で構うことができない。

そんな環境で、まほがまだ幼いみほを一生懸命に世話をした。そのためかみほはまほを姉としてより、むしろ母として意識していた。

母代わりの姉のに甘える妹。ほほえましく、そしてどこか歪な姉妹。

そんな二人が、今日はいつもより遠くに出かけることにした。もちろん妹みほの考えだ。

「みてみてお姉ちゃん！畑だよ畑！」

「いつもお家の近くで見てるだろう」

「違うよお姉ちゃん！」みほは頬を膨らませる「あれは小麦！これはとうもろこしの畑だもん」

「そうなのか」まほは心から感心したように言う「みほは賢いな」

「えへへ、でしょ？みほ、お家の本で習ったんだー」みほは花が咲いたように笑った。

みほの笑顔。この笑顔が見たくて、みほはよくないと思いつつも、ついつい甘やかしてしまう。

姉もまた、違う形で妹に依存しているのだった。

「お姉ちゃん、みほあの畑で遊んでくる！」

「ああわかった。私はここで見てるよ」

「うん！」

みほは持ってきた戦車のオモチャと、奇妙なデザインをしたクマのぬいぐるみを持ってトウモロコシ畑に走って行った。妹の趣味は変わっているのだ。

その様子をぼんやり見ていると、視界の端にどこか異質な雰囲気を感じた女性が目に入る。

なんとなくその女性を眺めていると、目が合った。

少しぎよつとしていると、女性の方からまほに近づいてくる。

「あなた、名前は？」

「西住、まほです」

「ご家族はいらっしゃらないの？」

「母と妹だけです」

「そう…」

「あの」まほは少し怯えていた「この畑を持っている人でしょうか」

「うん？」

女性は目をパチクリさせる。

「もし持っている人でしたらすいません。あそこで遊んでる妹に注意してきます」

「いいえ、ちがいます」女性は少し笑って「あなた、しっかりしてる。

いいお姉ちゃんなのね」

「そんな…」まほは頬を赤らめた「そんなことありません、姉として当

然です」

「でもその当たり前のことが出来るお姉ちゃんが、どれほどいるのかしらね」そう言いながら、女性は手元のホロパッドに何かを書いた。

「あなたの妹さん、いつもああして遊んでいるの」

「ええ。元気な妹です」まほは目を細めた「妹のためなら何でもできます」

「ほんとうに？」いやに真剣な目をして女性が問う。

まほはそれに少しむきになって言う。

「当たり前です。姉ですから」

「そう…」

それから女性は何も言わず、遠くで背を向けて遊んでいるみほをただじっと見つめていた。

「みほはああなると一時間でも二時間でも遊んじゃうんです。わたしが見ていないと不安で…」

「そう…」

また気のない返事。まほは少し怪訝に思い、女性の覗き込もうとする。

何かをこらえている表情…どこかで見たことがある。そうだ、たしかあれは…

「…ごめんなさい」

「え？」思わず聞き返した「どうして謝るんですか」

もしかしてやっぱり畑の持ち主で、みほを怒ろうとしているのかも知れない。

思わずみほを大声で呼ぼうとしたが、後ろからなにかやわらかいもので口を塞がれ、声は出なかった。

「ごめんなさい」

この表情はさっきと同じ…これは久しぶりに三人でお夕食をたべたときのお母様の表情だ…

それを思い出した次の瞬間、意識は黒い闇の中に落ちて行った。

第二話 海軍規約45812条

暗い闇の中から意識を戻したとき、まほは無機質な鋼鉄のはらわたの中に横たわっていた。

酷くだるい。昔風邪を引いた時よりもずっと。

今自分はカプセルのような…見たことがある、コールドスリープポッドだ。そこに入れられている。

カプセルのふたが開く。

そこからどうにか上体だけ起こし、あたりを見回してみる。

機能性のみが目的な空間。油や鉄の匂い。そして見知らぬ男。

見知らぬ男、彼は何らかの制服を着ており、どこかの組織に属しているようだった。

「あの」

まほは恐る恐る声をかけた。

男は何も答えない。

「あのー」今度は強く言ってみた「わたし、どうしてここにいるんでしょうか」

やはり男は何も答えない。

それでも挫けずもう一度聞く。

「ここはどこですか。妹は？」

今度こそ男は反応した。言葉ではなく視線でだ。

「ひっ」

その剣幕に、おもわず声を漏らした。

「着いたぞ」

どこに？なにが？そう聞く暇もなく、それまでいたコールドスリープポッドから起き上がらせられた。

天井や壁が妙にぴかぴかした施設の中を進んでいく。

途中の通路で同年代の少年少女たちも自分と同じように連れて行かれて見えている。

そのまま更衣室に連れて行かれ、少年少女たちと制服に着替えさせられた。

その制服には一人ひとり数字と名前が振ってあり、自分のはへM a h o—212」と書かれている。

まるで囚人のようだともほは思う。

着替えが終わると、またどこかに連れて行かれた。今度はあの男もいっしょだ。

私の保護者かのように前を歩いていく。周りを見ると、ほかの子供たちも同じのようだ。

お家で見えたことがあったかもしれない。たしかハーメルンの笛吹き男だったか、あの本の挿絵によく似ているかもしれない。

まほはそうぼんやりそう思った。

そうしているうちに扇状の広い部屋に着く。

真ん中に女性が立っている。あの人はあの時の女性だ…

まほは酷く驚いた。隣を見ると、丸刈りの男の子も驚いているようだった。

席に着けと言われ、そのまま席に座るとあの女性が咳払いをして話し始めた。

「海軍規約45812条により、あなたがたはここにUNSC特殊プロジェクトに徴用され、SPARTAN—IIというコードネームを与えられます」どこか声が上ずっている。

右斜め前の女の子が立ち上がって部屋から逃げ出そうとしていたが、付き添っていた大人によって抑えられていた。

あの女性が一步前に出た。

「あなた方は人類に仕えるために選ばれたの。訓練を受け、最高の戦士になって、地球と植民地のすべてを守るために」

そうか。

まほの中に何かがすとんと落ちた。

最近、特に反乱軍の活動が活発だとお母様に聞いたことがある。ほんの3、4年前にも首都ウルガルドの市長が暗殺されたとか。ハーベストは駐留する軍隊が少なく、そういった集団から標的にされやすいとも話していた。

そんな存在から植民地を守る。それはハーベストも…ひいてはみほも守れるはずだ。最早心の中に先ほどまでの不安と恐怖心はない。「理解するのは難しいかもしれませんが。でももう家には帰れないのよ」

みほにもう逢えない。それはもちろん悲しい。胸が張り裂けそうなほどだ。

だが、まほはもうずっと前から、部屋で一人で泣いているみほを見てから決めている事がある。

“みほのためならなんでもする”と。

「ここがあなたたちの家になるの」

女性が強張りを隠せていない声で言った。

「これからは、一緒に訓練を受ける皆が家族よ。訓練はとても難しいしとてもつらい。けどあなたたちみんな、一人残らずやりとげるわ」嘘だ。まほは直感でそう感じた。おそらく立ち止まりでもしたら置いて行かれる。

「今日は休んで。明日から訓練が始まります」

「解散ー」

一際体格のいい男が声を張り上げる。

それを合図に、子供たちがぞろぞろと部屋を出ていく。

みな打ちひしがれた表情であったり、困惑しきった表情だが、誰一人泣いてはいなかった。

まほはそれを当然と考え、泣くどころか、むしろどこか誇らしげに部屋を出て行くのだった。

第三話 Military Reservatio
n 01478—B

「起きろ！訓練生！」

SPARTAN—II 候補生として拉致されてきた次の日。

まほの意識は頭に響く大声によって浅い覚醒を果たした。

「起きろと言っている！訓練生！言葉の意味が分からんのか！」

つづいて鋭い痛み、右足を棒か何かで叩かれたのを感じる。

今度こそはつきりと目を覚ました。

目の前にあの時の男がいて、しかしまほをあ那时的比ではないほど鋭くねめつけていた。

先ほどまほの足を叩いたであろう警棒を、今度は火花を散らせながら振り上げて怒鳴る。

それで叩かれたらたまらないと、半ば転げ落ちるようにしてベッドから降りた。

周りの子供たちも大体同じ反応をしていた。

「俺はメンデス上級曹長だ」

昨日見かけた丸刈りの男の子の隣にいる男が声を張り上げた。

「残りはお前らの教官だ。全員彼らの指示に従え」

彼は宿舎の奥を指さした

「全員でシャワー室に行った後、ここに戻り、全員で着替えろ」

まほも含め、皆もあつけにとられていた。

「ちんたらするな！さっさと行け！」メンデスが突然隣の男の子に警棒を押し付けた。

火花が散るのが見え、男の子はベッドに倒れこむ。

それを見たまほは、弾かれたようにシャワー室に走った。走りは少し自信がある。いつもみほをおいかけていたから。

一番乗りでシャワー室に到着したまほは、女性は慎みを持ちなさいと常日頃言っていた母に内心謝りながら寝間着と下着を脱ぎ捨て、飛び込むようにシャワーの個室内に入った。

ひどく冷たいシャワーだ。それでもしっかりと体を洗う。

洗い終わったあと、まるでシャトルランの様にベッドに引き返し、用意されていた上下グレーのトレーナーに着替える。

トレーナーの胸には〈Mahoor212〉の刺繍がされていた。

メンデスに急かされ、言われるがままに外に出るとまだ空は青みがかかっていて、太陽は出ていなかった。

メンデスに十五人ずつの列を三列作れと言われ、まほは初めて自分と同じ境遇の子供たちが75人ほどいることを知る。

教官たちにどやされながらも、どうにか列が出来た。まほは3列目だ。

まほは今考えるべきでは無いことと理解しつつ、みほが今何をしているか、自分がいなくなつて大丈夫かなどを想像した。もう帰れないと言われた以上、想像する他無いのだから。

「拳手跳躍運動を始めるー」メンデスが叫ぶ「百回だ。やれ」

教官たちが腕を挙げて飛び跳ねるのを見て、まほもそれに倣い運動を始める。

猛抗議している女の子もいたが、すぐに警棒の火花で黙らせられていた。

ああはなりたくないから従った。

百回が終わるころには、先ほどシャワーを浴びたときの様に全身が濡れていた。

ようやく終わったと思ったが、それは勘違いだとすぐに知る。

「よし、では腹筋を百回だ。やれ」まほは眩暈がするのがはつきり分かった。

腹筋が終わったあとはスクワット、さらにそれが終わった後には屈

伸が続く。

途中二度も吐き、鼻水と涙が止まらなかつたが、どうにか全て終わらせた。

まさに息絶え絶え。そこに水のボトルが運ばれてくる。

まほは今までしたことが無いほど乱暴にボトルを引つ掴み、一気にあおった。

だが勢いが付きすぎたのか、脱水防止で塩の入った水はまほの気管支を駆け巡った。

まほは酷くむせ、何度もせきをした。

そうこうしているうちにメンデスが次の指示を出す。

「次は走る。俺についてくるんだー」

まほと他の子供たちもよろよろと立ち上がり、メンデスの後を追って走り始めた。

とつくに体力の限界は迎えていたが、それでもまほは走り続けた。

気が付くとドームが目の前にあり正門には“海軍士官学校”と書いてある。

どれだけ走ったのかわからないが、とにかく目的地には着いたようだ。

建物の前には前時代的、というよりは古代的な服装をした女性が見えた。古代ローマの彫像の様な格好だ。

そんな格好をしたした女性が何故こんなところにいる？まほはそう疑問に思ったが、女性の頭の周りを回っている光点を見て疑問が氷解した。

Vidで見たことがある。あれはAIだ。

そのAIはメンデスをねぎらい、まほ達に自己紹介をしてきた。

名前はデジャと言うらしい。そして授業があると告げられた。

またどうせ碌なものではないだろう。そう思っていたが、いい意味で裏切られることになる。

第四話 チームメイト

授業と聞き、まほを含めた数人の候補生たちが不満のうめき声をあげた。

「授業を受けたくないなら、そのまま朝の運動を続けてもらっても構わないのよ」

まほ他数名は急いで階段を駆け上った。

建物の中は涼しく、快適だった。

しかもクラツカーがたつぷり乗ったトレーと、牛乳一パック丸々がひとりひとりに用意されていたのだ。

まほはクラツカーをかつくくらい、牛乳をがぶ飲みした。今度はむせないように気を付けながら。

このまま寝てしまおうかとも思っていたが、デジャの授業が始まるとそんなものは吹き飛んでしまう。

教室全体がホログラムによってどこかの田舎のような光景に変わったのだ。子供たちはミニチュアの自然に興味を持ち、小さな山や海岸のあたりを歩き回った。

まほにとつて豊かな自然はハーベストを想起させるもので、ホログラムを見て故郷が恋しくならないようにあまりじっくり見ないようにした。

そこに山や川と同じ比率の小さな兵隊がテルモピユライに進軍していく姿が見えた。

デジャがいうには彼ら三百人はみなスパルタンで、歴史上最高で最強の兵士だという。

まほや他の子供たちはペルシャ兵をなぎ倒していくスパルタンにすっかり夢中になってしまった。

だがまほがスパルタンに熱中している間、隣に座っていた丸刈りの男の子がまほのクラツカーをこっそり摘まんでいた。

まほはそれに気づき、お返しにと彼が気を取られている隙に牛乳をすつかり飲みきってやった。

丸刈りの男の子——ジョン——117と服に書いてあった——がそれに気づき抗議しようとしたが、スパルタンが勝利したのを見届けた子供たちの歓声に遮られ、声を上げることはなかった。

デジャが「次は遊び場よ」というので、まほはようやく普通に遊べると安堵し、部屋から急いで出て行った。

メンデスの言う「すぐそこ」にあった遊び場は、金属製のポールと頑丈なロープで出来たジャングルの様な物だった。

メンデスが子供たちを集め、三列を作れと指示を出した
今度は皆素早く列を作ることができた。

「最前列はチーム1だ」メンデスは言う「その後ろがチーム2その後ろがチーム3：後は分かるな」

まほは自分がチーム6と呼ばれることを確認した後、両隣を見た。

右は今朝訓練に抗議して電磁警棒で殴られた女の子で、色素の薄い髪の色をし、勝ち気な釣り目が印象的だ。トレーナーに書いてある名前は〈Erika—050〉とある。

左は昨日扇形の部屋に集められたとき、その場から逃げ出そうとしていた女の子だ。癖毛で優しい瞳。その瞳には今は涙を浮かべていたが、同じくトレーナーに書いてある名前は〈Koume—014〉。

全員女子だ。周りを見ると、男子だけのチームや女子はいても2人までがほとんどで、まほのチームのように三人ともが女子のチームは少なかった。

「今日の遊びは、ベルを鳴らせだ」メンデスが指差した先は、ポールとロープのジャングルのてっぺんにある、10メートルはありそうなポールの上に付いたベルだった。

「あの鐘にたどり着く方法はたくさんある。どんな方法でもいいので、チーム全員で鐘を鳴らすんだ」

全員か…。まほは思った。
全員で協力しなければ。

そうだ、ここで一番にベルを鳴らしたチームになれば二人と仲良くなるし、より早く強くなる事ができるかもしれない。

まほはそう打算的に考えた。

ジョンが突然メンデスに質問した。

「勝つたら何をもらえるの？」

メンデスはジョンを計るように見つめた「夕飯だ、訓練生」

「チョコレートケーキもある」子供たちは歓声を上げた「ただし、最下位は飯抜きだ」

それは困る。

まほは周りに挨拶をした。

「わたしはまほ。きみたちは？」

右の子は「エリカよ。足引っ張らないでよね！」と答えたが、左の子はこちらを見るだけで何も言わなかった。

「用意しろ」メンデスの号令。

「なあ」

「何よ」とエリカ。

「考えがあるんだ」まほは言う「まずわたしが一気に走って行ってベルの近くまで行く。そこで他の皆をじやまするから、二人は右と左の道から別々にベルに向かい、鳴らしてほしい。鳴らした後はわたしを引っ張り上げてくれないか」

エリカたちはあまり乗り気ではないように見える。

「一位になれば、ケーキを二人にあげよう」とっておきの切り札だ。

「やるわ！」エリカは目を輝かせる「あなたもやるでしょ」

左の癩毛の子もうなずく。よし、うまくいったぞ。

「始め！」メンデスが叫ぶ。

まほは2人話した通りに真っ先にベルにかけて行った。障害物は

たくさんあつたが、どうにか切り抜けていく。

半ばを少し過ぎた辺りで気が付いた。すぐ横に自分と同じように味方を置いてベルめがけて走っている男の子がいた。

ジョンだ。どうやらまほと同じ考えのようだ。

またこいつか！まほは少しようんざりしていた。

ここでジョンに抜けられるとチームが一位を逃してしまふ。こうなったらジョンが上った後、ジョンが自分のチームメイトを引き上げるところを妨害するしかない。

まほはそう決め、いったんペースを落としてジョンの後ろに付いた。

ジョンがベルの付いたポールを上り始めるのを見て、まほはジョンの後ろからポールをよじ登り始めた。

ポールの途中には一旦休める台のような物があり、まほはそこに陣取ってポールを登る子供たちの妨害を始めた。

「なにするんだよ」「いたい！」

妨害を受け、次々と下のマットに落ちていく子供たち。

5人目を落とした辺りでエリカと癩毛の子がベルの下にたどり着いた。

思った通り。左右の道は意図的に障害物が少なく置いてあつた。

そこを通れば遠回りにはなるが、安全に、そして確実にベルの下にたどり着くことができる。

まほは6人目をたたき落としながら再びポールにしがみつき、チームメイトの手助けをし始めた。

「わたしの手をとれ！」息を切らしたエリカは素直にまほの手をつかみ、登っていった。

続いて癩毛の子。

だがなかなか上がってこない。顔を真っ青にしている。

どうやら高所恐怖症のようだ。

まほは歯噛みする。このままだと妨害した子供たちが復帰してしまふ。

そこでまほは自分から降りて「おい、棒をつかむだけでいい」と言う
と、癩毛の子もそれに従った。

まほは彼女を肩車するようにしてポールを登り、彼女は押し出される
ようにポールを登っていく。

休める台を過ぎた辺りで上から声がした。

「つかまってー！」エリカの声だ「早く！」

癩毛の子は上と下からの助けにより、ようやくベルにたどり着いた。

またも息絶え絶え。それでも最後の力を振り絞りベルを鳴らす。
癩毛の子もだ。

やがて全員がベルを鳴らした。

ジョンのチームメイトは最後尾だった。どうやらチームメイトを
置いて1人だけでベルを鳴らして、チームメイトは置き去りにしてし
まったようだ。

「みんなよくやった」メンデスがねぎらう「全員頑張ったが、とくに一
位のチーム6！妨害はいただけなが、チームメイトのために身を
削ってよく手助けをしたな」

それにジョンが食って掛かる「ぼくが一位だぞ！」

「ああ、おまえは、な」メンデスはジョンを睨みながら続ける「だが残
りは最後だった。だから飯抜きだ」

メンデスは周りの皆にも説明した。

「これだけは忘れるな。チームの負けは、みんなの負けだ。チームメ
ンバーを犠牲にして1人だけ勝っても、それは負けだ」

まほは自分のしたことが正しいことだったと確信し、思わず笑顔に
なった。

それをエリカと癩毛の子が、どこかうつとりとした表情で見つめて
いるのに、まほは気づかなかった。

「では夕飯にしようー！」

豪華な夕飯だった。ターキーのローストだの、カップのアイスクリームだの：

空腹の子供たちにとって、まさしく天国のような光景だった。ジョンのチーム3を除いては。

「じゃあ約束通り」チームメイトに言う「わたしのチョコケーキをあげよう」

しかし2人は受け取ろうとしない。

「遠慮しないでいいんだぞ」

「いやよ！あんたの…いや、リーダーのおかげで一位になってご飯も食べられたのよ。これ以上は悪いわよ」

「うん…わたしもいらない」癩毛の子も言う「リーダーのおかげで食べられるんです。だから逆に私がケーキをあげないと」

「わたしもそうする！はいリーダー！」

二人からケーキを差し出される。

まほは困ってしまった。甘えられることはあっても、施されたことではないのだ。

「わかった」まほは唸る「でも後からケーキを返せと言われても返さないぞ」

「うん！」「わかりました！」

二人の満面の笑み。

まほは心動かされた。妹の笑顔と重なって見えたのだ。顔は似ても似つかないというのに。

まほは頭を振り払い、その考えを消すと立ち上がって他の席に向かう。

妨害してたたき落としてしまった子供たちに、お詫びとしてケーキを献上しようとしたのだが、またも断られてしまった。

妨害された側は、結局夕飯は食べられたしそれも作戦の一部だと言いい、特に気にしていないとまほに告げた。

自室に戻る途中。

「あの」癖毛の子が言う「まだ自己紹介してませんでした」

「小梅…いや、コウメです」

「コウメね」エリカもそれに続く

「わたしはエリカよ。…最後はリーダーね」

いつの間にか自分がリーダーになってしまっていた事に今更気づく。

その事実には咳払いしつつも、最後にまほが自己紹介する。

「改めて、わたしはまほ…いや…そうだな。マホだ。これからよろしく頼む、エリカ、コウメ」

第五話 小さな暴君

翌日の訓練も、昨日とおおむね同じ内容だった。

朝の運動にストレッチ。

2キロ走ってデジャのもとに向かい、座学を受ける。

今回はオオカミの映像だった。

オオカミは群れで襲いかかり、自分よりも大きな相手を仕留める、といった内容だ。

チームプレイの重要性はよくわかっているので、真剣に授業を受けた。

隣のジョンもクラッカーを摘まんだりはしてこなかったし、マホもジョンの牛乳を飲むことはしなかった。

やがてオオカミが巨大なヘラジカを仕留め、貪り食う場面ではコウメが小さな悲鳴を漏らしていた。

そして授業が終わると、子供たちは再び遊び場に集まった。

遊び場は昨日と様変わりしており、ロープの本数が増え、滑車が追加され、さらにはベルの付いたポールの高さが20メートルとなっていた。

今度は昨日の様には行かなそうだ。きちんと三人一緒に進んでいく必要がある。

そこでマホはコウメを真ん中に置き、自分が前、エリカが後ろの塊を作って進むことにした。

後はルートだが…マホは道が細めで滑車が少ないルートにした。一人がミスにしても他のメンバーがすぐに手助けしやすいルートだからだ。

その作戦を二人に話していると、ふとチーム11が目付いた。

チーム11は長身だが気弱そうな少女と、4歳のみほと同じくらいの背の少女。そして穏やかそうな少年のチームだ。

トレーナーのタグにはそれぞれ〈Nonna—102〉〈Ekaterina—073〉〈George—052〉とあった。

エカテリーナが指示を飛ばし、ノンナとジョージはそれに応えようと指示の内容をイメージトレーニングしていた。

これは厄介だ。強敵になりそうだとマホは思った。

「行けー」メンデスの号令が飛ぶ。

マホたちチーム6は塊となり、その質量で他の候補者を跳ね飛ばしながら突き進んでいった。

チーム11はエカテリーナがその身長を活かし、ロープの間をすいすい進んでいく。

ジョンたちチーム3は非常に足の速い少女が全員抜かして滑車付の籠に乗ろうとする。

そうしてそれぞれが違うルートで進む。

最初にポールのそばに着いたのはエカテリーナだった。

ロープまみれの道を大幅ショートカットし、ベルのすぐそばの台に立ち、残りの二人のために、置いてあった滑車付エレベーターを下に放り投げた。

ノンナとジョージは体格がよく、そのおかげであつという間に滑車のロープを引き、頂点に到着しベルを鳴らした。

が、ここで問題が起きた。エカテリーナの背が低く、ベルに届かないのだ。

そこで長身のノンナがエカテリーナを肩車し、無事にベルを鳴らすことが出来たのだった。

チーム3は昨日のジョンのワンマンが嘘のようなチームプレイをし、三位に入っていた。

マホのチーム6は四位だった。早さよりも確実性を取ったためだ。

終わった後、最下位以外のチームが夕飯を食べていると、エカテ

リーナがチームメイトをつれながら話しかけてきた。

「あんた、中々やるわね」

「どうしてだ？」マホは訝しむ「わたしたちは四位で、君たちは一位。その言葉は二位辺りにでも言うべきじゃないのか」

「そうかもね」エカテリーナはうなずく「でもね、他のチームは危ない橋を渡ってた。それとは逆にあなたたちは危なくないように集まって進んでいたじゃない」

「それがどうしたんだ」

「あなたの指示でしょ？」

「ああ…」

「やっぱりね」エカテリーナは得意げに続ける「ふつう、競争で一位をとつちやうと次も絶対にとるって考えちやうじゃない」

「そうかもな」マホは答える。

「だけどあんたは違った。いそがずあわてずにチームの安全を考えて作戦を立ててた」

エカテリーナはにいと口元を歪めて言った「そうそうできないわよ、そんなこと」

「よしてくれ」マホは手を横に振る「買いかぶりすぎだよ」

「そうかもね。でも、カチューシャはあんたが気に入ったのよ。ありがたく思いなさい」

「カチューシャ…きみの愛称か」

「そうよ！エカテリーナでカチューシャ！まだノンナとジョージにか呼ばせてないけど、特別にあんたたちにも呼ばせてあげるわ！」

「それはうれしいな」

「わかればいいのよ！」

そこにジョージが口をはさむ

「カチューシャはお友達が出来てうれしいだよ。ねっ？」

「ジョージ！余計なこと言わないの！」

その光景にマホは微笑ましくなり、手を差し出した

「ふふふ…これからよろしく。カチューシャ」マホが言う「一緒に頑張

ろう」

「ええ、よろしくね！マホーシヤ！」

カチューシヤがマホの手を握る。

「マ、マホーシヤ？」

なんだそれは。

「そうよ」カチューシヤが胸を張って言う「あんたの愛称！これからそう呼ぶからね！」

なんて強引な。拒否権はないのか。

まるで暴君だ。

珍妙な愛称にノンナやジョージ、エリカにコウメ、果ては向こうの席のジョンまで笑っていた。

「あ、ああ…」

「じゃあね。ピロシキ〜」

唾然とするマホを気にも留めず、カチューシヤ達は手を振りながら去って行った。

「中々変わった人たちでしたね」先ほどまで笑っていたコウメが言う

「マホーシヤ…くくく」

いや、まだ笑っている。

「こ、こら。笑っちゃ…駄目よ…ぷふっ」エリカまでも。

マホはなんだかすごく恥ずかしくなり、素早く食事を済まそうとした。

早く自分のベットに突っ伏したかったのだ。

真っ赤になりながらも、急いで夕食をかき込む。

「おい！」メンデスが注意する「よく噛んで、ゆっくり食え。体によくないぞー！」

「すみません！」

マホはあわてて謝った。

それを見たほとんど全ての子供たちによって、食堂は爆笑の渦に巻き込まれたのだった。

余談だが、しばらくマホはジョンや他の皆にもマホーシヤと呼ばれるようになった。

第六話 雪の進軍

徴兵から二年。

思えばあつという間だったような気がする。

アルバトロス級輸送機の中で、マホはふと昔を思い返していた。

最初はみほを守る為に訓練を必死にこなしてきた。

だが二年たった今、この状況を望んでいるし、SPARTANの兄弟たちもかけがえのない存在となっていた。

自分を無二のリーダーとして慕うエリカとコウメ。

互いにライバル視し、切磋琢磨しあうジョンとその親友のサムとケリー。

わがままで強引だが、面倒見がよく気弱な訓練生から特に慕われているカチューシャ。

皮肉屋で物事を斜めに構えがちだが、実は純粋なアリサと、それになんだかんだとついていくナオミ。

格闘訓練で並ぶものいないフレッド、昼寝が趣味で百発百中のリンド、飄々としていても仲間を大切に作るロン、猪突猛進気味なアツシユ、深い知識をもつファサド、冗談が大好きなルネ。

他にもたくさん兄弟たちがいる。

皆個性的な、かけがえのない仲間で、そして家族だ。

もちろんみほのことを忘れた日は一日として無かった。

いつだって心配しているし、面倒を見れなくて本当に申し訳ないと思っっている。

それでもこの場所で学ぶこと全てがみほの身の安全のためになると思えば、我慢もできる。

それに、いつか自分たちの役目が終わった時にまた会うことも出来るようになるだろう。

その時は兄弟たちをみほにも紹介しよう。きっと仲良くなれるは

ずだ。

「リーダー、もう着くみたいですよ」コウメに肩を叩かれる「今のうちに地形を確認しちやいましょう」

「わかった。ありがとうコウメ」

今から始まる訓練は、おそらく全員バラバラに輸送機から降ろされるのだろう。

そう予想したマホは周りの兄弟たちに輸送機の窓から地形を把握しておくよう、小声で伝えておいたのだ。

「今回の任務は簡単だ」

そう言ってメンデスは紙束を取り出し、ケリーに手渡す。

「配ってくれ」

「はい！」ケリーが敬礼をし、全員に紙を配り始めた。

マホが渡された紙を見ると、それは大きな地図のひとかけらに見えた。

「これから降下する地域の地図の一部だ」

メンデスが訓練の説明を始める。

「地上に降りたらその地図に書いてある回収地点に行け。迎えを寄越す」

思った通りだ。マホはほくそ笑む。

「ひとつ言っておくことがある。最後に回収地点にたどり着いた者は、ここに取り残される」

ここから徒歩だと。マホは顔を大きくしかめた。

この地域は輸送機でもだいぶ時間がかかった場所だ。徒歩になると戻るのがいったいどれだけかかることか。

さらには雪も降っている。この辺りは山脈で、雪崩でも起きたら大変なことになりかねない。

そんな場所に兄弟を一人置いていけるものか。

ジョンを見ると、この恐れ知らずの兄弟もまた顔をしかめていた。

117番：ジョンがまず最初に降りた。

わたしはその次だ。

輸送機が少しの浮遊感とともに止まり、雪原へと着陸する。

ここがマホの着陸地点のようだ。

「リーダー、ご無事で」

コウメが不安そうに言う。彼女はいつでも心優しかった。その優しさに何度マホやエリカは救われた。

「大げさだよ、わたしは大丈夫さ」マホは彼女を安心させようとする。

「212番！前部中央に向かえ！」

「わかりました、チーフ・メンデス」

「すぐ行くからね、リーダー」エリカがエンジン音に負けじと叫ぶ。

それを背にマホは雪で覆われた土の上に飛び降りた。

降りたマホは、まず上空から見た地形を参考にジョンとの合流を目指す。

たしかあの川を背にして進めば、ジョンの着陸地点へ行けるはずだ。

マホはそう考え、川を背に進んでいく。

しばらく進むと、ジョンがブルーベリーを摘んでいるところが見えた。

「ジョン」マホが呼びかける「まずはわたしたちだな」

「そうだな。あとはサムあたりと合流したい。それからみんなで決めた合流地点にいこう」

「わかった」

「ブルーベリー食べる？」ジョンがたずねる。

ずいぶんとたくさん摘んだ様だ。仲間思いのジョンらしい。

「ありがとう。もらっておこう」

「ところで、どうする」ジョンが聞いてくる「俺は一人だけ置いていくなんてできない。みんな家族だ」

マホは、やはりSPARTANのリーダーになるのはジョンが相応しいと考える。

「そうだな…輸送機を奪って全員で帰るとか」

「本気？それは…いい考えだな。チーフがいなけりや出来たかもしれ
ないけど…」

「いない隙を狙うとか。メンデスがいるとも限らないしな」

「確かに。考えてみよう」ジョンはうなづく。

「ところで…マホってその…結構過激なこと考えるんだな。あんまり
そういうこと言わないって思ってたよ」

「普段は、な。だが今回は違う。兄弟の誰かを犠牲にしてのこのこと
基地に帰るわけには行かないよ」

「それに」マホは続ける「メンデスも言っていた。『チームメンバーを
犠牲にして1人だけ勝っても、それは負けだ』と」

ジョンは大きく頷いた。自分のライバルが、自分と同じ考えを持つ
ていることにジョンは大いに元気づけられたのだった。

少ししてサムとも合流し、他愛ない話をしているうちに合流地点で
ある湖に到着した。

湖を一周し、集まっていた兄弟たちと合流。これで全員そろった。

ジョンは皆を集め、地図をパズルのピースの様に組み合わせた。

ちようどカークの持っていた欠片に回収地点が記されていた。

「ここだ」

「でもここからだと言われれば一日はかかるぞ」サムが続ける「すぐに出発しな
いと」

「よし、行くぞ」ジョンは言った。

しばらく歩いていると、ファジャドが言った。

「今のうちにさ、誰がここに残るか決めておこうよ」ファジャドが続け
る「僕たちはみんな一緒に回収地点に着くんだろ？誰かが残らない
と」

「くじ引きで決めるとかどうかしら？」アリサが皮肉気に言った。
「だめだ」

ジョンが力強く言った。

「誰かが残るなんてだめだ。全員で帰るんだ」

「でもどうするの？」ケリーが頭をかきながら言う「メンデスは…」

「そのメンデスは言っていた。“チームメンバーを犠牲にして1人だけ勝っても、それは負けだ”と。それを守ろう」

マホはジョンに言った言葉をもう一度、今度はみんなに向かって言う。
う。

ジョンはそれにうなずき、言った。

「マホの言うとおりだ。まだ方法は決まり切っていないけど、必ずみんなで帰るんだ」

そして太陽が空の端を赤く染色し始めたころ、一行はようやく回収地点に到着した。

降下艇を見つけたが、周りの様子がおかしい。

ジョンとサムが偵察に行くと、四人の男たちが降下艇の周りを固めていたという。

しかも軍服は着ておらず、見覚えもないとか。

まずは彼らが自分たちを見たとき、どんな反応するかを知っておきたい。

そうマホが言うのとジョンはうなずき、考えをめぐらせた。

「それには誘いウサギがいるな」

そう言うのとケリーが立候補した。

「あたしがやる。この中で一番早いので、わたしだからね」

「わかった、奴らを誘い出してくれ。俺は様子を見る」

その一方、マホはエリカに指示を出す。

「エリカ、足が折れたふりをして道に出てくれ。ケリーがおびき寄せた奴らに見せつけるんだ」

「残りは集まって森の中に待機」ジョンが言う「あいつらがエリカを助けようとせずに何かしようとしたら…」

「オオカミの授業を覚えてるな？」マホがジョンの言葉を続ける「あれをやる。石を集めるんだ」

全員がにやつと笑った。

「ねえ！あそこで友達が怪我してるの！助けてあげて！」

ケリーが大声で男たちに言う。

それを聞いた男たちは警棒をつかみ、ケリーに近づいてきた。

「あつちよー」そう言つてケリーはエリカの方向に走っていく。

男たちは追いかけたが、ケリーにはとても敵わず見失つてしまつた。

「ちっ、つまらん」

「張り合いがないなまつたく」

「所詮は餓鬼どもさ」

ジヨンはこれ以上聞く必要はないと、その場を離れた。

彼らはやはり敵だ。

「痛い！誰か助けて！」

エリカの声が森の中に響いた。

「さっきの餓鬼が言つてた奴か」

男たちはエリカに気づく。

「あつ、ねえ！足が折れてる！すごく痛いの！助けなさいよ！」

男たちは警棒に電流を流しながらすすぐそばまで近づく。

「ああ、もつとひどくしてやるよ、嬢ちゃん」

「今だっ！」

マホの鋭い指示が飛ぶ。

突然、おびただしい数の石つぶてが飛んできた。

七十五人分の石を浴び、男たちはたまらずうずくまり、そのままなすがままにされた。

そのうち男の一人が警棒を取り落した。

マホはそれを拾い、電流を流してうずくまつた男たちを叩く。

それに乗じて他の子供たちも一斉にとびかかり、男たちを滅茶苦茶に殴打した。

マホは冷たい目で血まみれになった男たちを見下ろす。

マホは怒っていた。仲間を、兄弟を、エリカを傷つけようとしたの

だ。思いつきり頭を警棒で叩いてやりたかったが、我慢した。ジョンも同じように怒り、しかしそれを抑えていたからだ。

ともあれ降下艇は確保した。

マホは全員に乗り込むよう言い、コクピットに向かう。

マホはCOMでデジャに操縦を頼み、オートパイロットで基地に帰還したのだった。

ジョンとマホは気を着けの体制で、チーフ・メンデスのオフィスに立っていた。

あの後、呼び出されてしまったのだ。

冷や汗が流れる。マホとジョンはすっかり萎縮してしまっていた。

そこにあの女性：ハルゼイ博士が入ってきた。

「こんにちは、ジョン、マホ」

ハルゼイ博士だけが、数字ではなく名前でマホ達を呼ぶ。

「117番、それと212番！」メンデスが怒鳴る「なぜUNSCの所有物を盗み、また降下艇を見張れと指示していた男たちを攻撃したか、説明しろ！」

マホたちは謝罪したかったし、償いもすると言いたかった。

だが泣き言と言いつきは絶対にしたくなかった。だからこそ堂々と答えた。

「チーフ」ジョンが言う「見張りは軍服も、階級章も身に着けていませんでした。身元が不明なので、自分たちの安全を図るために攻撃したまでです！」

「うむ」メンデスは報告書に目をやった「そのようだな。では降下艇を盗んだことについては？」

「誰も置いていくわけにはいかないからです！チーフ」ジョンは答える。

「降下艇を盗んだことは、ジョンは関係ありません」マホが声を張り上げる「それは私のアイデアです。わたしが考え、実行しました」
「何言ってるんだマホ！」

「静かにしろ！」メンデスが吼える。

「どうしましょうか、マダム」メンデスはため息をつき、少し困ったようにハルゼイ博士を見た。

「それは明らかね、チーフ。ジョンを部隊長にし、マホを副長に置くようにするのね」

閑話一 地吹雪

マホ達が拉致されてから3ヶ月後のある日。

「ノンナ！ノンナどこにいるの！返事しなさい！」

「ノンナは今自分のベッドに引きこもっちゃってるよ」

拉致されてからずっと過ごしている基地内、その廊下で二人の声が反響する。

一人は大声で歩きながら大声で人探しをし、もう一人はそれに追いつがりつつ答える。

「引きこもってる？…どういこと」

大声で叫んでいた人物…カチューシャがもう一人に聞く。

それに年齢の割にかなり大柄な少年ジョージが答える。

「彼女はその…ホームシックみたいなんだ。リーチが…ヴェイリーが懐かしい、帰りたいって」

「いまさら？」カチューシャが小ばかにしたように言う「ずいぶん鈍感なのね。カチューシャはとつくに泣いたわ！」

「それって自信満々に言う事じゃないと思うよ…」

彼女らは自分たちのいる基地が、まさしく惑星リーチの大地の上に建設されていることを知らない。

拉致される際、薬品などで意識を失わせ、まるで他の惑星に来てしまったかの様に思わせられていたのだ。

さらに彼女らの家族はONIによりリーチから退去させられており、万が一にも家族との再会などは起きえないようになっていた。

「カチューシャとあんたもリーチ出身でしょ？…これはどうきよー？のカチューシャたちがどうにかしないとね！」

カチューシャはそれが自分に課せられた任務かのように言う。

「ぼくとしては」ジョージがおずおずと言う「こういうときはそつとしてあげた方がいいと思うけどなあ。一人になりたい時って、やっぱりあると思うし」

「あらあ、ノンナもジョージみたいにはっとかれて、おねしよしてもいいってわけ？あんた見かけによらず、ひどいわね」

「カ、カチューシャだってお漏らししてたじゃないか！シーツを隠すのにぼくとノンナをこき使ったのは誰だっけ！」

「うっさい！…とにかくノンナのベッドに行くわよ」

「でも、消灯時間まであと五分だよ。ぼくは部屋が遠いからもう戻らないと」

そう言つて、ジョージは自分のベッドのある部屋に戻つてしまう。

カチューシャは廊下にぽつんと取り残されてしまった。

ため息をつき、辺りを見回すと、部屋があった。

部屋のすぐそばには、他の候補生の名前とともに〈Nonna—102〉と書いてある。

これだ！カチューシャは自分の運の良さに改めて自信を持ち、その部屋に忍び込んだ。

中に入ると部屋はすでに消灯されており、多数の寝息が聞こえる。

その中を忍び足で進み、ついにノンナのベッドの前にたどり着く。

それまでは寝息しか聞こえなかったが、こうしてノンナのベッドの前に立つとすすり泣きのような声が聞こえる。

このベッドの持ち主のものだろう。

カチューシャは意を決してベッドの中に潜り込んだ。

「ぐすつ…うう…」

「ねえ」

「ひゃっ…いムグ…」

急に話しかけられ、思わず声を漏らしたノンナの口をあわてて塞ぐカチューシャ。

「どうして…泣いてるの？このカチューシャ様に話してみなさい」

声のポリリズムを落として聞く。

「その…ヒツグ…訓練が終わって…いろいろ考えていたら…急に不安になって…ぐずっ、お母さんとかおばあちゃんがどうしてるかって考えたら…うぐううう、涙がとまらなくなっただえ」

「…」カチューシャは黙って聞いている。

「も、もう会えないって言われた…家族にも…友達にも。わたしはずっと独りぼっちなんだあ」

「うっさいわね！」カチューシャは黙って聞くのをやめた。

「カチューシャだって悲しいわよ！ママにも、パパにも会えないだなんて！でもね、ここへはそれよりも大切な、もっと大きな使命のために集められたの！」

「使命なんて…知らない…。知らない人のために戦いたくない…。」「じゃあ」カチューシャは叩きつけるように言う「カチューシャのために戦いなさいよ！そうすればノンナの家族にも友達でもママにでも子供にもなつてあげるわよ！」

ノンナはその言葉に呆然としていた。

「だからね」カチューシャはふっと微笑む「泣くのはやめなさい」

「あ…りがとう。ありがとうございます、カチューシャ」

ノンナの目には深い尊敬と羨望の念が込められていた。

「もっと感謝してもいいのよ！」

「でも…お母さんとか子どもになつてもらわなくていいですよ」

「余計なこといわないの！」

ややあつて、二人はこらえきれずベッドの中でくすくすと笑いあつた

「あの、カチューシャ」ノンナがおずおずと言う。

「なにかしら、ノンナ」

「その…お話、しませんか」

「もちろん！」

二人はたくさんの事を話した。
家族の事、リーチの事、嫌いな食べ物や好きな食べ物。
それは年頃の女の子たちがするものと何ら変わりはなかった。

「ふふふ、それ、本当ですか？」

「本当よ。でね、その後……」

「訓練生！」

「わっ」「ひゃっ」

メンデスの声だ。

たまらずノンナとカチューシャはベッドから飛び出る。

「073番、102番……貴様らは就寝時間も守れんのか！今何時だと思ってる！3時だぞこの馬鹿どもが！それに勝手に別室のベッドに入るとは……」

「す、すみません！」ノンナがあわてて謝る。

「貴様ら二人ともに罰を与える。朝飯抜きと訓練場の清掃だ！」

わたしのせいだ。ノンナは深い後悔に駆られた。わたしがカチューシャに甘えたから……。

「すみません。わたしがカチューシャを」

そこにカチューシャが割り込んだ。

「カチューシャがノンナを起こしてたのよ。寝れなくて、暇だったからね！文句ある？」

「……そうか。お前は暇だったから102番の睡眠の邪魔をしたのか？ちがう、わたしのせいだ。」

「そう言ってるじゃない」悪びれずに言う。

「よくわかった。073番、お前には二人分の罰を受けてもらう。朝

食ぬきと訓練場の清掃だ。終わるまで飯はない。それと一人でやれ」「なんでそんなことしなくちやなんないのよ!」

「これは命令だ、訓練生」

「…わかったわよ」カチューシヤはしぶしぶ答えた「命拾いしたわねノン…102番!」

違う…違う…。カチューシヤは何も悪くないのにわたしのせいで。

「では解散!073番、速やかに自室に戻れ」

それにカチューシヤは素直に従い、部屋を出て行った。

結局、ノンナは言い出すことが出来なかった。

翌日。

朝の訓練と授業を終え、週一回の自由時間。

その時間にカチューシヤは一人で訓練所の清掃をしていた。ノンナ以外、誰にも知られずに。

一人で黙々と清掃するカチューシヤ。それを物陰から覗いているノンナ。

訓練所にはその二つの人影があった。

ノンナは強烈な自己嫌悪と罪悪感に苛まれている。

あの時とつきに自分のせいだとメンデスに言っていれば…。

あんなに良くしてもらったのに、結局は自分がかわいいのか…。

そんな考えが頭の中をぐるぐるとまわり続けていた。

カチューシヤはあんなにくたくたになっても清掃を続けている。

わたしはぬくぬくと安全な場所からそれを眺めているだけ。

これでいいのか。本当にこれでいいのか。

ノンナがそう自問しているとき、それは起こった。

カチューシヤがついに倒れてしまったのだ。

朝も昼も食わず、さらには寝不足。ついでに訓練生で一番の小柄。こうなるのは最早必然だったと言える。

ノンナは最早物陰から見ていることはできなくなり、たまらずカチューシャのもとに駆け寄った。

「カチューシャ！」ノンナは叫ぶ「大丈夫ですか！」

「おなか…すいた」

「早く医務室に！」

「いや…だからおなかがすいただけ…」

「だれかー！」ノンナは完全に混乱していた。

「人を呼んできます」

「ノンナ？あんた人見知りだったじゃない」

「そんなこと言ってる場合じゃありません！すぐにでも清掃を終わらせて、ご飯を食べなければ！」

ノンナはそう言うと言走り出した。

確かこの時間、他の子供たちが集まっているのは…。

居た！デジャの授業部屋だ！

そこでは子供たちが思い思いに歴史のVidを見たり、チェスなどの知能遊戯で遊んでいた。

「あー…ノンナ？どうしたんだ息を切らせて」

ノンナに真っ先に気が付いたサムが尋ねる。

「カチューシャが訓練所の清掃で倒れて…早く医療の人を呼ばないと」

「なんだって?!どうして清掃なんて…おれたち聞いてないぞ」ジョンが困惑している。

「わたしが…」ノンナは息を詰まらせながら答える「私のせいなのに、カチューシャが私の代わりに…」

「詳しい話は後で聞こう。カチューシャを助けないと！」ジョージが力強く言う。

「でも…みんなが罰を受けるかも…医療の人を呼んだ方が…」

「水臭いこと言うなよな！」とカーク「俺たちは仲間だ！」

「そうだな」マホも言う「こんな時こそ助けあわないと。さあ急ぐぞ」

結局、全員で訓練所を清掃した。
全員でやったおかげで、あっという間に終わった。

ノンナはカチューシャにベンチで休むように言ったが、自分だけここから離れるわけにはいかないと行って聞かない。

仕方がないのでノンナはカチューシャを肩車し、そのまま清掃した。

当のカチューシャはノンナの肩車をいたく気に入り、その後も頻繁にねだるようになる。

「訓練生！何をしている」

清掃が終わり、皆で一息をついていると、訓練所にメンデスの大声がこだました。

「仲間を助けているのであります！」ジョンが勇ましく答える。

「チーフは仲間を決して見捨てるなど仰られました。それを実践しているところですよ」マホもそれに続く。

「むう…そうか。だが俺は073番に一人でやれと言ったが」
今こそ恩を返す時だ。

「わたしが皆を連れて行きました。カチューシャは悪くありません！」ノンナが今までにないほど大声を張り上げた。

「ノンナ…」

「そうです。俺たちも自分でついて行っただけです、カチューシャに言われたわけじゃないです！」カークも声を張り上げた。

「自分で決めて行動しました！」とロン。

「そうか…」メンデスは頷く「では073番を除いた全員に罰だ！訓練所20周！始め！」

「はい！」

「みんな馬鹿よ…」

「なあ073番」メンデスはいつになく柔らかい声で言う「いい仲間を持ったな。お前が仲間を見捨てなかったからこそ、誰もお前を見捨てなかった」

「うん…」

「うん、ではなくはい、だ。073番。さあ、食堂に行け。お前の分の飯は取ってある」

メンデスが食堂のある方に顎で示す。

しかしカチューシヤは首を横に振った。

「ううん…みんなが走り終わるまでここで待ってる」

「そうか。…今度は消灯時間を守れよ」

カチューシヤは、どこか誇らしげな表情で走り続けるノンナたちを眺め続けるのであった。

第七話 兄弟

雪原の訓練からさらに6年。

今やSPARTAN候補生たちは、徴兵以前の時間よりも長く訓練を受けている。

その結果は素晴らしく、14歳程度ながら肉体はオリンピック選手と同等に、頭脳は海軍士官学校主席と同等と、非常に高いレベルになっていた。

仲間の絆はさらに強固に、何物にも壊せないほどのものになっている。

マホはそんな自分に満足し、また彼女に付き従うエリカとコウメも自らに自信を持っていた。

そんな日々の中、マホは無駄なものを排した自室で日課の戦術論の教本を読み、時間をつぶしていた。

「リーダー」エリカに呼ばれる「メンデスから招集がかかってますよ」部隊長はジョンだというのに、相変わらずマホをリーダーと呼ぶエリカ。

「わかった。今行く」

エリカはそれまではマホに対して普通に接していたが、マホが雪原の一件や、その後副長に任命されたことによりコウメの様に敬語で話しかけてくるようになった。他のSPARTANには今までと変わらない態度だったが。

マホはそれを少し寂しく思いながらも、エリカの尊敬に報いる人物になろうと心掛けていた。戦術論の教本もその一環である。

マホは本をたたんでエリカとともに部屋を出る。

部屋の外で待っていたコウメとも合流した。

「それにしても、いったいなんでしようね」

「さあな。まあ行けばわかるだろう」

そのまま指示された部屋に向かう。思えば一度も入ったことのない部屋だ。

新しい訓練だろうか。もしそうでも、私たちに乗り越えられないものは無いとまたも証明することが出来る。

マホは少し高揚しつつも、それを顔に出さずに歩く。ポーカーフェイスは得意技なのだ。

「ここですね」部屋に入りつつコウメが言う「医務室みたいな感じですが…」

コウメの言った通り、そこは医務室のような清潔感と消毒液の匂いがした。

辺りを見ると殆どの兄弟たちが部屋の一角に集まっていた。

「こつちだ」サムに呼ばれた「ここに集まってろつてさ」

「なんなのかしらね」とアリサ。

「今回も楽勝だけ」カークが自信たっぷりに言う。

「まー気楽に行こうよ」お気楽に見えるロン。

「油断しないようにな」フレッドが周りをたしなめる。

兄弟たちがいつも通りで、マホはいかなる困難があろうが今回も全員で切り抜けられると強く確信した。

「マホー、何笑ってんの」ルネにからかわれる。

「いや、私たちなら大丈夫だな、とね」

そして十分後。

全員が髪の毛を剃られ、体中にレーザーで何らかのラインを引かれた。これから何が始まるんだ。

マホはさすがに気になり、不安と好奇心を持った。

処置を終えたメンバーから順番に、ゆりかごのような台の上に横たわるように指示された。カークが最初だ。

横たわった後、カークが麻酔をかけられるのを見てマホは今回の試

練が何かを理解した。

手術だ。何のための手術で、した後どうなるかなどは全く読めないが、恐らくはとても重要なことなのだろう。

ついにマホの番が来た。

「リーダー……」

エリカとコウメが不安そうに近づいてきた。

「心配するなエリカ、コウメ。大丈夫だ。先に終わらせるから、後からちゃんとついてくるんだ」

「わかりましたリーダー。ご無事で！」

そしてマホに麻酔が効き始める。

マホは痺れるような感覚に身をゆだね、意識を手放した。

・
・
・
・
・

夢を見ている。これは夢だとはつきりと分かりながら見ている。

夢の中でマホはまほになり、みほと一緒にいた。

ここは……ハーベスト。私の故郷。まだ幼いみほとその面倒を見る私。

畑ではしやぎまわるみほ。お母様の申し訳なさそうな表情。お手

伝いの……菊代さんの横顔。

わたしが守りたいもの。私達が守らなければならないもの。

かんがえがまとまらない……きようだいたちはどこだ。

いや、わたしのきようだいは……しまいはいもうとのみほだけだ。

きようだいはだれだ。

わたしはだれだ。

わたしはまほ。みほのいいおねえちゃん。

わたしはマホ。あつめられ、くんれんしてきた。

わたしは……私はSPARTAN—212。戦うために選ばれた。

ひどい頭痛と、全身の凄まじいまでの痛み。それがマホの起き抜けに感じたものだった。

私は一体…そうだ、手術で…。

辺りを見回す。心なしか、周囲がよく見えるような気がする。

ふと手を見ると、手術前にレーザーで記された通りに傷跡が走っていた。まだ血が滲んでいる。

「一体何をされたんだ…」

マホの不安げなつぶやきは、空中に溶けて消えた。

しばらくしてベットから起き上がり、よろよろと他の兄弟たちの様子を見に回った。

まず、すぐ近くにあったフレッドの台を見てみた。

“成功”と台の近くのモニターには映し出されていた。

マホはホツとし、他の台も見てみることにした。

きつと、みんな無事に切り抜けられた事だろう。

フレッドの向かいにあるコウメの台をしてみる。

“成功”

やはり！

マホは気を良くし、そのままコウメの横の台を見た。

この台は確かルネだったな。そう思いマホはルネに視線を移した。

そこで気が付いた。

おかしい。ルネはこんなに肩が大きかったか？こんなに猫背だったか？

こんな…こんな人間とは思えないような骨格だったか？

マホは一気に血の気が引いた。

台のモニターに視線をやると“重大な損傷。バイタルに乱れあり

“と映し出されていた。
他にもこうなった兄弟たちがいるかもしれない。
マホは真つ青になって部屋を歩き回った。

そしてマホは見た。

カークは：ルネと同じようになってしまっている。

フアジャドは何度も痙攣を起こしていた。

カサンドラは皮膚がおかしくなっている。象皮病だ。

ソレンは涙と鼻水を絶えず垂れ流している。

カチューシャは全身の手術跡から出血している。

ロン、ミーネ、チェンに至っては“バイタル消失・死亡”とモニターに書かれていた。

あんまりだ。こんなあんまりじゃないか。

戦えず、使命も果たせず、彼らはこんなところで死んでしまうのか。

“成功”と書かれた兄弟たちは半分強。

まさかこんなところで半分近くが脱落するとは。

マホはのろのろと歩き、まだ確認していない最後の台を見つけた。
エリカの台だ。

見たくない。見たくないが見なくては。

マホは恐る恐るエリカを見た。

見たところ、特におかしくはなっていないようだ。

マホは心から安堵し、モニターを見た。

“心臓部の肥大化を検知”
なんだこれは。

どういうことだ。

このままだと戦えなくなるのか。
ルネたちと同じように。

エリカも。

このままだと死んでしまうのか。

ロンたちのように。
させない。

これ以上の犠牲はいらない。

「だれか！だれか来てくれ！彼女はまだ間に合う！他の皆もだ！助けてやってくれ！頼む！」

マホは外部に繋がっているであろうインターフォンのボタンを押し、必死に呼びかけた。

それを聞きつけたのか、ハルゼイ博士たちがやってきた。

マホはそれを見届け、博士たちの麻酔により再び意識を手放した。

第八話 別離

「ここに我々は倒れた兄弟の遺体を宇宙にゆだねる」

メンデスが厳粛な顔で瞳を閉じた。

いつもはたくさんの兵士があわただしく走り回っているこのミサイルベイも、今は閑散としていた。

彼がミサイル発射ベイの制御ボタンを押すと、灰の入った容器がゆっくりと発射管に装填されていく。

「敬意を示し……気をつけ！」メンデスが大声で叫んだ。

それにジョンやマホたち生き延びたスパルタンたちは一斉に敬礼する。

「義務、名誉、自己犠牲。彼らの死は、その一つも損なうものではない。我々は決して彼らを忘れない」

メンデスが言うのと、マホたちが乗っているUNSC航空母艦アトラスのランチャーから容器が射出されていく。

メンデスは長い敬礼を終えると、こう言った。

「全員、解散」

多くの仲間がいなくなってしまった。

任務から無事に生き延びたのはマホを入れて39人。

無事ではないが生きているものは13人。

残りは先ほど宇宙に去っていった。

その事実胸を痛めながら彼らを見る。

カークやレネはあのまま神経浮揚ジェルタンクに入れられている。

カチューシャは全身をギブスで固定され、台の上に乗せられていた。

ファジャドは車いすに座り、体を痙攣させていた。

エリカは……エリカも車いすに座り、呼吸器をつけている。

他にも大きな損傷を受けてしまっている兄弟はたくさんいた。

看護師たちがエリカたちをエレベーターに運んでゆく。

ジョンとマホは急いでその前に立ちふさがった。

「仲間をどこに連れて行く気だ」

「自分は…あの、命令をうけて」

そこでメンデスに呼ばれる。

「部隊長、それと副長、来い」

2人は看護師にここで待つようお願い、メンデスのもとへ向かった。

「チーフ、あれはどういう事ですか」マホが詰め寄る。

「彼らはもう戦えない。ここには属してはいないんだ」

「彼らはどうなるのですか」ジョンが問う。

「海軍は仲間を手厚く保護する」メンデスが力強く答える「彼らには高い身体能力こそ無くなったが、まだ優秀な知性は持っている。まだ任務を計画したり、戦略を立てたり、調停や…」

「ならよかった」マホはホツとした。

「自分たちが望むのはそれだけです。仕える機会さえいただければ」

マホはエリカへと近づこうとする途中で人だかりを見つけた。

カチューシャの台の近くだ。

「カチューシャ…」

カチューシャのすぐそばにはノンナとジョージにクララ、そしてニーナとアリーナもいた。

「みんな心配しすぎなのよ」カチューシャは周りに檄を飛ばす「いい、カチューシャはもう戦えない。でも、必ずあなたたちを助けることが出来るところに配属されるよう、チーフに頼んどいたわ。だから…だから後ろは任せなさいよね！あんたたちは前を向きなさい！じやないとシベリア送り20ルーブルよ！」

「それって」ノンナが泣き笑いのような表情で言う「訓練所の周りを20周の事ですよね」

それを見届けたマホは、踵を返しエリカのもとに向かう。

エリカの隣にはすでにコウメがいた。

「リーダー…」

「エリカ」

「すみません、こんな情けない格好で…」エリカは呼吸器越しに弱々しく言う。

「いいんだ」マホは言う「何も情けなくはない」

「手術の前、リーダーは後からついて来いって言っていましたよね。でも…私についていくことが出来なかった。それが…それが情けなくて！」

マホはそれを聞いてたまらずエリカを抱きしめた。

「いいんだと言ったろう、エリカ」マホは言う「どんなことがあってもお前は私の大切な仲間で、家族だ」

「リーダー…」エリカが涙ぐむ。

「そうですよ。私は運が良かったから生き残れました。けど、本当は私じゃなくてエリカさんが成功するべきだって思っています」

コウメは自嘲気味に笑う「私にはリーダーの補佐の仕事が務まるかどうか…」

「そんなこと言わないの。あんたは私がいなくても、しっかりリーダーの助けになりなさい」

エリカがいつものようにコウメに喝を入れた。

「そうだぞコウメ。お前も家族じゃないか。それにお前だって私にはもつたいないぐらい優秀な兵士だ」マホも断言する。

「…わかりました。精一杯、その大役務めます！」

「頼んだわよ」エリカが笑う。落ち着いたようだ。

「その件なんだがな」

メンデスが割り込んできた。「050番や066番、それと075番などは〴〵回復の見込みあり」と診断された。時間はかかるが、そのうち復帰できるかもしれない」

「ほ、本当ですか！エリカやソレン、カサンドラ達が…また…！」

マホは驚愕する。

「本当だ」メンデスはにやりと笑う「特に050番は早ければ半年で復帰できるとのことだ」

「エリカ、やったぞ。お前はまだ戦える」

「そうみたいですネ…よかった…」

エリカは心から安堵していた。

尊敬するリーダーに置いて行かれずに済む。それがどれだけ喜ばしいか。

「エリカさん、あなたが復活するまでの間に、リーダー補佐の役割取られても泣かないで下さいよ」

コウメがいたずらっぽく挑発する。

「言うじゃないコウメ。待ってなさい、こんなのすぐに直してやるんだからね！」

ああ、これだ。

この結束の固さこそが我々だ。

二人に笑顔が戻った。

この笑顔を守らなければ。

他の兄弟たちもだ。

仲間が多く死んだのは本当に悲しい。

だが今は生き残った兄弟たちに目を向けねば。

それが、志半ばに散って行った兄弟たちの望みでもあるはずだ。

第九話 超人

仲間の葬儀の後で、メンデスに教わったことがある。その時はジョンも一緒だった。

「隊長は部下を死ぬとわかっていいる場所へ向かえと命じる心の準備を持っていなくてはならない」と。

「部下の命を費やすのは、必要とあれば許される」と。

だがこうとも言っていた。「その命を無駄に費やすことは決して許されない」と。

そうメンデスは言っていた。

私はこれを胸に刻んで行こうと思う。

仲間の命をせめて有意義に消費する。ということ。

強化手術からひと月弱。マホは他のスパルタンたちと同じく、アトラスの体育館にいた。

まず準備運動。それからアームカールを始めた。

しかしマホは奇妙に感じる。あまりにも軽すぎるのだ。

うっかり重りをつけ忘れたかと思ひ確認してみるも、ちゃんとついている。

どうにもしっくりこないのです、高重力エリアに向かった。

そこでようやく普段の感覚に近くなった。

マホはホツとし、そこにある器具を一通り終わらせ、サンドバッグに狙いをつけた。

まず手始めにジャブ…おかしい、すさまじく大きな弧を描きバッグが揺れている。

これではトレーニングにはならないので壁に着けてバッグを殴ることにした。

お次はストレート…今度はバッグを突き抜け、壁にも穴があいた。

さらにはバッグから零れ落ちる断熱材のような素材がこぼれてゆき、それが地面に落ち、さらに細かく砕けるのをはつきりと認識できてしまったのだ。

マホは顎に手を当て、考える。これが手術の効果なのだろうか？ これほどの効果をもたらすとは。だからこそ代償も大きかったのかもしれないが。

そう考えると、この結果を素直に喜ぶのは難しくなった。

しかしこれはとても有用だ。うまく活用すべきだな。

そこまで考えて、マホは初めてカートが向かいのベンチに座っていることに気が付いた。

「やあ」カートが話しかけてきた。「マホも驚いている口かい？」

「ああ…これは想像以上だよ」

「そうだな…」

二人は口をつぐむ。まだこの状況に心が追い付いていないのだ。

それから五か月弱。それまで利用していた訓練施設がスパルタンたちの強化された身体能力に耐えられず、別の施設に移動することになった。

そこではパワー・ローダーの様な外骨格スーツを着込んだ教官たちが、スパルタンたちと訓練を行っていた。

なぜそんな物を教官が着るのか？そう考える者もいたが、すぐに納得することになる。

スパルタンたちの身体能力が高すぎるのだ。

経験豊富な教官たちの拳は止まって見え、隠れてしまえばIRセンサーでも使わないと見つからない。さらに時速50kmで走ることが出来、反射能力も凄まじい。

こうなってはほぼ死蔵されていたMKIスーツを着込むことでしか訓練を行えなくなってしまった。

初日は教官の誰もスーツを着ておらず、またスパルタンたちが自身

の力をまだ良く理解していないのもあり、3人の死者を出してしまつたほどののだ。

しかもスーツを着ていても教官がスパルタンたちに勝てることは一度も無い。

まさしく想定外の強化だった。

ブラックチーム、始め「メンデスのアナウンスが実践戦闘訓練室内に響く。

そこにはブラックチームのリーダーであるマホ、そしてその指揮下にあるエリカ、コウメがいた。

エリカは半年と診断されていたが、恐るべき執念により三か月弱でリハビリを終え、復帰した。

マホやコウメもリハビリに手を貸したのも手伝つてか、担当の医師やハルゼイ博士も舌を巻くほどの再生を見せたのだった。

訓練開始の合図とともに、マホはエリカとコウメにアイコンタクトを送った。

それを受け取りかすかに頷いた二人は接近するスーツを着込んだ教官の大ぶりなパンチをよけ、岩陰に隠れた。

マホは教官にあえて正面から接近する。教官はそれに対しスタン弾装填の機銃を掃射するが、自動照準機能が追いつかないほど素早く背後に回り込み、スーツのエネルギーケーブルにとりついた。背後ろにとりついているマホを引きはがそうと教官が四苦八苦しているうちに、エリカとコウメが岩陰から飛び出し正面から教官に組み付く。そして機銃の装着されていた右腕側に組み付いたコウメが力任せにスーツから機銃をもぎ取り、すかさず露出した頭部に発射した。

あつという間だ。一分もかからなかった。

一人目の教官と戦っている途中に投入されるはずの、二人目の教官が間に合わなかったのだ。

それから一分を過ぎ、ようやく二人目が投入されるものの、コウメ

の機銃の援護を受けたマホとエリカにあっさりと引き倒され、そこから起き上がれるわけがなく、エネルギーケーブルをエリカに引きちぎられ機能を停止させた。

「やはり素晴らしいわ」ハルゼイ博士が観覧席でメンデスに話す「ジョンのブルーチームも素晴らしかったけど、彼女らのブラックチームも感嘆せずにはいられないわ」

「でしょう、マダム。特にブラックチームは正面からの攻撃の重要性を強く理解しており、他のチームですら忌避する状況ですら率先して挑む傾向にあります。それも被害をほとんど出さずに」

メンデスが誇らしげに答える。

「ではチーフ。彼らは本物の戦いをする準備は出来ているかしら？」

「ええ、マダム。我々が命じれば、彼らは極めて効率的にその命令を遂行するでしょう」

そこでメンデスははつとなる。

「博士、〃本物の戦い〃というのは…」

「実は、ONIですら想定していない事が起こったの、チーフ。彼らはその件にスパルタンたちを使ったがっているのよ」

「彼らは十分に準備は出来ています」メンデスは目を細めた「しかし予定よりもはるかに早い。何が起きたのです？ たしかハーベストの近くで激しい戦闘が起きたとは聞きましたわ」

「その噂は古いわね、チーフ」ハルゼイは恐怖に滲んだ声で言った

「ハーベストでの戦闘はもう終わっているわ」

「では…？」メンデスが怪訝そうに聞く。

「ハーベストはもうない。破壊されてしまったのよ…」

第十話 「敵」

訓練がほぼ完了したことをチーフメンデスから通達され、ジョンたちブルーチームが反乱軍幹部を暗殺し、自らの価値を証明した後の事。

他のスパルタンたちは自分たちがスパルタン初の“公的”な任務に参加できないことを悔しがったが、ジョンたちを名誉あることだと大いに祝福した。

その祝福とは、模擬戦でブルーチームを鬱憤を晴らすように指揮するチームで叩きのめすということだったが。

カート率いるグリーンチームやジェロームのレッドチームはブルーチームと戦い、勝利を収めた。

皆負けず嫌いなのだ。

そしてジョンがパープルハート勲章を受理した後の事。

スパルタンたちは黒い礼服を着せられ、ある一室に集められていた。

扇状の部屋：かつてハルゼイ博士に自分たちの使命を伝えられた部屋だ。

ここでいったい何を？マホがそう思っていると、誰もいない中央の壇上にスポットライトが点灯された。

そこに、博士よりも少し年配の人物が現れた。階級は中将のようだ。

スパルタンたちはそれに気づき、姿勢を一層正す。

「休んでくれたまえ、スパルタン」中将は言う「私はスタンフォース中将だ。そしてこれはベオウルフ」

中将は嫌悪をにじませつつ、幽霊のようなAIを示した「我々ON Iに付属するAIだ」

「さて、今回はいくつかの重要な案件があるさっそく始めようか」

部屋が暗くなり、部屋の中央にある惑星が映し出された。

あれは……。

「ハーベストだ」中将がマホの言葉を代弁するかのようにつつた「人口約300万。UNSC管理領域の外縁部に位置する惑星だが、最も生産的で平和な惑星だ」

ハーベスト。私と妹の故郷。私が守らなくてはいけないもの。

マホは思わず頷く。しかしなぜここでハーベストの話題が？

「軍事カレンダーの2/3、一四二三時に、ハーベストの軌道プラットフォームがレーダーでこの物体を捉えた」

ぼやけているが、どこか流線形だとわかる物体が檀上に現れた。

「分析はしたが、正体は明らかにされなかった」中将は言った「未知の物質で建造されていたのだ」

建造？となると人工物。しかし材質が不明とは一体。マホは考える。

「ハーベストとは」中将は話を続ける「その後まもなく連絡が取れなくなった」

今

何と

言った？

マホはしばらくの間、先ほどまで考えていたことを放棄し、放心状態になった。

「…彼らはイプシロン・インディ星系に入り…」

いや、ただの通信アレイの故障だ。もしくは…

「…これから君たちに見てもらうものを発見した」

そうだ、税の引き上げによるボイコットか！それで通信施設の職員もストライキを起こしたのだろうか。

住民の生活の妨げにならないよう、内部工作しろとの任務だろうか。でなければ…

惑星ハーベストのホログラフが変わった。
瑞々しい草原や丘は穴だらけの砂漠に変わっていた。
砂漠ではガラスの様に鈍く陽光を反射し、地表は穴だらけになり水蒸気が上がっていた。

あちこちに赤く光っている地域があった。

「これがハーベスト…その『名残』だ」

これが…こんな地獄が…ハーベスト？

マホは先ほどとは比べ物にならないほど恐怖し、混乱した。

しかし、住民は脱出したはず…

マホは壊れかけた心で、どうにか希望的観測を引っ張り出した。

「住民は」脱出したんだー…そのはずだー…みほはまだ…

「全滅したと結論された」

全滅。二文字。たった二文字で妹や母の運命を結論付られた。

記憶の中の母の口を横に引き結んだ表情が…みほのあの笑顔が灰になってゆく。

トウモロコシの畑。いつ母が帰ってくるのかとまほに聞いたときの妹の泣きそうな顔。妹の笑顔を守ると決めたあの日の夜。母が帰れなくなった後、初めて見せてくれた妹の笑顔。全てが溶けてくすんだガラスになっていく。

まるで彼女たちが運命を共にしたハーベストの様に。

守れなかった。命よりも大切なものが。

防げなかった。大切なものを奪おうとする手より。

私はなんのためにここまでやってきたのか。

守るものもないというのに。

これからどうして戦えというのか。

生きる理由もないというのに。

壊れかけた心におぼろげながら情報が入ってくる。

「プラズマ兵器」「エネルギーシールド」「非人類の宇宙船」「高度なテクノロジーを持つ種族」「ゴヴナントと自称」「敵からの通信」

敵からの通信：敵からの：敵。

これは敵の情報だ。

「敵」。ハーベストを破壊した「敵」。みほを：殺した「敵」。

敵だ。奴らは憎むべき敵だ。

殺す。これまで教わってきたやり方で。

マホの壊れた心が復讐心と歪に混ざり合い、また一つになった。

敵は高い技術力を持ち高度な兵器で武装しているらしい。

だが、それがどうした。どんな手を使ってでも殺す。

敵は殺す。

そのために集められ、訓練してきたのだ。

これは個人的な復讐でもある。

だが、個人的でない復讐などあるものか。

守るものはもうない。あるのは復讐だけだ。

マホの心が再び歪に組みあがったところ、話はメンデスが新しいスパルタンのために訓練の完了とともにここを去ることに移っていた。

もう、メンデスの演説は終わっていたが。

「敬礼！」ジョンが叫ぶ。

「解散だ、スパルタン。幸運を祈る」

メンデスがマホとジョンのもとに向かってきた。

「最後の教訓だ、部隊長。それと副長。自分よりも強い相手と戦うとき、どんな戦術が有効だ？」

マホが答える「相手が実力を発揮する前に、素早く急所を突き、他

が対応する前に潰す」

「他には？」

「その組織がワンマンな構図の場合、その用心の人質も有効でしょう。また、工業生産地を狙って破壊工作。もしくはBC兵器を用いて敵居住地の殲滅などが有効かと。敵が陸戦を仕掛けてくるときに核を使うのもいいかもしれません」

「そ、そうか…」メンデスは気圧されていた「部隊長はなにかあるか」
「…ええ。退却し、ゲリラ戦を行いながら増援を待ちます」

「そうだな。後もう一つの選択肢として」メンデスはマホをちらつと見た「降伏という手もある」

マホの視線が恐ろしく細まる。

「と言つても、我々はそれを考えてはいけないな」

「奴らは降伏を受け入れないでしょう」

ジョンがマホに気を遣いながらも言った。

「確かに。だが反乱分子どもや、臆病風に吹かれた連中がそう考えないとは限らん。手土産を持って…」

「もしそんなことがあるば」マホが被せるように言った「誰であろうと必ず私が殺します。それも敵ですから」

第十一話 雷神のいかずち

ハーベストが破壊されたと伝えられてからしばらく。

ジョンはハルゼイ博士から指示された対反乱軍作戦を、すべてのスバルタンたちが実践経験を積めるよう、既に纏まったチームごとに出撃させた。

カートのグリーンチームや、マホのブラックチームだ。

マホはその精神状態から一時は出撃を再検討されたが、本人の弁により出撃を承認された。

本人が言うだけあり、ブラックチームの成果は目覚ましかった。

誰一人負傷しないのは当然とし、目標の反乱軍基地に潜入してからわずか19分で目標の反乱軍幹部を暗殺。さらに副次目標として設定されていた武器庫、それとフライトデッキまで完膚なきまで破壊した。

この結果にはハルゼイ博士も称賛したが、“あまりに破壊的すぎる”と苦言を訂してもいた。

そこで博士自ら心理評価を行ったものの、特に問題なしと評価される。

マホはハーベストの現状を知らされ、血を分けた妹が殺されたことに対し、エリカたちが思わず息をのむほどの激情を見せた。しかしエリカたちはマホの復讐に協力を誓い、どこまでもついていくと宣言した。

それに対し一言マホは「すまない」と言ったきり、それ以降少しも表情を崩すことが無くなる。

まさしく能面のような表情であった。

そして今、スパルタンたちはあるプロジェクトのためUNSCフリーゲート“コモンウェルス”に乗艦し、チ・セティIV星系へと向かっていた。

「隊長…その」エリカが口ごもる。

エリカとコウメは、ブラックチームとしての任務を境に、マホを正式に隊長と呼ぶようにした。マホが名実ともにチームの隊長となつたためだ。

「どうした？何かあるならはつきり言え」

「い、いえ。これから行くことになるマテリアルグループのダマスカスで、何を受け取るのかな、と」

「博士は」コウメが答える。「パワードスーツのようなものだ」と

「パワードスーツ？教官たちが使ってた奴みたいなの？あんなんじゃないめよ。私たちは生身の方がよほど強いからね」

「たしかMJOLNIR…だったか」マホも話に加わる。「博士の考案したものだそうだ。スパルタンの運動能力や反射能力を考慮しているようだから、心配はしなくていいだろう」

「あの人なんでもできますね…」コウメが半ば呆れたように言う。

そんな風に、各人思い思いにカードや軍事情報誌などで時間をつぶしていた。

しかしそこにコモンウェルスの艦内放送が響き渡る。

「SPARTAN—117、ただちにブリッジに出頭せよ」

「はいマダム。マホ、みんなをまとめておいてくれ。いつでも出撃できるように」

ジョンがブリッジに向かう。

「聞いたな」マホがスパルタンたちに指示を飛ばす「軍服を着て、装備の点検をするんだ」

それから数十分後。どうやら敵…コヴナントの戦闘艦と戦い、退け

たようだ。

コモンウェルスには亀裂がいくつも走り、主砲となるMACも使用不能となってしまうている。

艦の状態に不安を覚えるものの、ひとまずは目的地に着くことは可能だそうだ。

ダマスカス：そこでMJOLNIRを受け取り、コヴナント艦を引きつけているコモンウェルスに再び乗艦する。

ダマスカスの薄暗い地下素材研究施設に着いたとき、マホは目の前にある緑色のアーマーに目を奪われた。

「プロジェクト・ニョルニルよ」ハルゼイ博士が言うと、一斉に施設のライトが点灯し、アーマーの姿がより鮮明に映る。

学者の常というものか、ハルゼイ博士はそれから小難しい理論などを話していた。

要約すると高い防弾性能に加え強力なパワーアシスト。さらに常人の五倍の反射神経を与えるとのことだ。

ジョンがまず試着し、その素晴らしい性能を見せつけると、他のSPARTANたちは我先にと技師によるアーマー装着を始めた。

マホの物はジョンの物と同じボディだが、指揮能力を考慮し、ヘルメットに指令アップリンクを装備されている。

スパルタンですら手間取るほどの反応速度に慣れようとアスレチックコースで四苦八苦していると、ブラックチームの姿が見えた。

エリカのアーマーはヘルメットが偵察型で、コウメは堅牢そうな防爆／EODタイプのヘルメット。

それぞれの希望したタイプのものだ。

「隊長、これすごいですね！全く体の動きを阻害しないし、まるで着ていない時みたいに快適です」

コウメが珍しく興奮した様子で言う。

「確かに。これほどのものとは」

マホはアーマーを装着し、体が大きく見えることも相まって、それ

までただでさえ限りなく頼もしいと感じていたスパルタンたちが、さらに頼もしく見えた。

これならやれる。

そう確信した。

そしてそれから1時間後。軌道上に停止していたコモンウェルスへアルバトロスで再び乗艦しようとするも、先ほどのコヴナント艦がまた戻ってこちらの様子をうかがっていると知らされた。

それに対し、部隊長であるジョンはハルゼイ博士にひとつ作戦の提案をする。

1チームを敵艦内部に生身で送り込み、内部から核弾頭で爆破するというものだ。

博士は最初許可を与えようとはしなかったが、ジョンの説得により作戦を承認する。

そこで問題になるのが“どのチームがやるか”という所だ。

当然みな立候補し、特にブラックチーム：マホはジョンに自分たちを行かせてくれと頼み込む。

しかしそれは却下され、結局ジョン率いるブルーチームが作戦を行うことになった。

ジョン個人としてはマホの復讐に手を貸してやりたい気持ちがある。が、皆の隊長としてはマホが復讐心を持って任務に望み、またコヴナントを直接見ることで自制心を保てなくなってしまうのではないかと懸念を持った。

ジョンは仲間の誰にも死んでほしくは無かった。

その旨をマホに伝えると、特に何か言う事もなく引き下がった。自身も把握していたからだ。

そしてアルバトロス後部ハッチ。

「ジョン：私からのメッセージを奴らに伝えてくれ。“くたばれ”と

な。頼んだぞ」

「わかった」ジョンが頷く「必ず伝えてやるさ。スパルタン流の宅急便でな」

「マホ、俺からも伝えとくぜ」とサム。

「私達も本気で怒ってるからね」ケリーも言う「家族の妹の仇、必ず取るよ」

「…ありがとう、ジョン、サム。そしてケリーも」

「花火だ。大きいのが打ち上がるぞ」フレッドまで。

マホは兄弟たちをとて誇らしく感じた。

「さあ行きましょう」リンダがジョンに促す。

「ああ。ブルーチーム、出撃だ」

ブルーチームが出撃し、マホが副長として残りのスパルタンに待機命令を出してから15分後。

コヴナント艦が内部から爆発を起こし轟沈するのが、遠くのアルバトロスからはつきりと見えた。

それからさらに数分後、ジョンたちが帰ってきた。

だが：一人足りない。

サムだ。サムがいない。

ジョンは言った。

「俺の命令でサムは残った。彼は英雄だ。奴らを倒せると証明した」
誰もジョンを責めはしなかった。ジョンはただ指揮官としての役目を忠実にこなしたただけだと知っているからだ。

スパルタンたちは仲間の戦死に深く心を痛め、しかしジョンと、死しても英雄となったサムに対し尊敬の念を持つのだった。

第十二話 C Q B

マホ率いるブラックチームは、UNSCによる対コヴナント大規模反攻作戦の一助となるため、SPARTANが最も戦果を挙げられる地上戦に投入されることとなった。

これからブラックチームが投入される惑星はハーベスト。マホの故郷だ。

それについてチームのメンバーや、同時に投入されるジョン達やデイジーに心配されるが、マホは自分が感情によってミスを犯さないと確信している。もう家族を失うのはたくさんだったからだ。

惑星ハーベストは、コヴナントとの初遭遇により破壊され占領されたが、この度UNSCはハーベストの奪還を決意。

史上稀に見る大部隊と艦隊を動員し反攻作戦が開始された。

今回の作戦でのブラックチームの任務は、首都ウトガルドを攻撃するUNSC機甲部隊への航空支援を妨害する、コヴナント対空部隊の排除だ。

ウトガルドを確保できればそこを橋頭堡に戦線を拡大できる。

そう目論んだ司令部からSPARTAN投入の指示が飛ばされた。

ブラックチームにとって、これが初の対コヴナント戦闘となる。

マホたちは地上戦ヘリカン輸送機で降下する前に、まだ情報の少ないコヴナント歩兵ユニットの情報を入念に確認していた。

2 m強の身長を持ち、高い身体能力と全身に薄い膜の様に張られているエナジーシールドを装備した「エリート」

背が低く、そして最も数が多い、文字通り肉壁となって数で攻める「グラント」

体は貧相なもの、高い跳躍能力と優れた視力を持つ「ジャツカル」
4 m近い巨躯を持ち、全身を覆う破壊不可能な金属の鎧と、爆発性

の燃料ロッドでさながら戦車の役割を持つ「ハンター」

まだそれほど確認されていないが、エリートをもしのぐ怪力と耐久力で突撃する「ブルート」

虫の様な外見を持ち、虫の様な羽で飛行しプラズマピストルを乱射する「ドローン」

これらが主に前線で確認された歩兵だ。

特にエリートは知能が非常に高く、他のユニットの隊長格に当たるとされ、優先して排除すべしと記されていた。

「隊長」

エリカに話しかけられ、マホはホロパッドをいじる手を止める。

「どうした」

「いえ、我々の投入される場所についてですが……」

「ああ。グラデシエイム市議会会館跡地だ。私は子供のころに一度母に連れられて行ったことがある」マホはどこか懐かしそうに眼を細めた。

「地下会議室もあり、そこを前線司令部にすると聞いた。地下だけあり、ガラス化されても残っていたのだろう。今は周囲はポッド重輸送機により兵舎やエアパッドなどが建てられ、要塞化されているはずだ」

「ウトガルド外縁部に降下するのでは？」コウメが疑問を口にする。

「ああ、その筈だったがどうやら件の司令部が敵歩兵ユニットに襲撃を受けているようだ。まずそこに向かい、敵を一掃してから改めてウトガルドに向かうよう指示された」

「また急ですね」エリカが呆れて言う「第一、何かやろうにも司令部がやられちゃ意味ありませんよ」

「とは言っても、敵は海兵隊員の反撃を受け、基地内の無人の兵舎とその付近の倉庫に立てこもっているようだ。こちらの戦力を見くびっていたらしい。ここでまず奴ら相手の戦闘に慣れよう」

「確かに。丁度いい機会だと思いませんか」

隊長のマホはオーソドックスにM A 37アサルトライフルを装備。エリカはM 392“DMR”で遠距離をカバー。コウメはM 45ショットガンで室内でのポイントマンを担当する。

そして全員サイドアームとして、中距離でも高い精度と威力を誇るM 6 G マグナムを装備している。

ブラックチームが着陸地点に選んだのは、コヴナントが立てこもっている兵舎近くのエアパッドだ。

そこからまずは倉庫を確保。次に兵舎を制圧という流れだ。

コヴナントは籠城に適したエネルギーの遮蔽物を兵舎内部と入り口付近に展開。さらに戦闘力の高いエリートが内部にいるため、海兵隊は作戦区域外での損耗を恐れ、うかつに手出しできない状況だった。

そしてそれが敵の狙いだった。こちらの作戦行動を遅らせるつもりのようなのだ。

しかし、司令部の近くに敵が存在することを許すわけにはいかない。

だからこそ、スパルタンによって迅速に制圧されなければならないかった。

同時に、地上戦でどれほどSPARTANが有効かを示す試金石でもある。

「着陸地点、見えてきました」コウメがヘルメットをかぶりつつ、くぐもった声で報告する。

マホとエリカもそれに倣いそれぞれのヘルメットをかぶる。

ペリカンが短い振動とともに地面から1mの所で静止した。

「ブラックチーム：行こう」マホが作戦開始の合図を出し、最初にハーベストの焼け爛れた大地に着地する。

それに二人は頷き、隊長に続こうとペリカン後部ハッチから飛び降りた。

ブラックチームは手筈通り、素早く倉庫に接近した。

「敵を発見。グラントとジャツカルが多数」コウメがヘルメットの内部データベースと敵を照合し、報告した。

「ジャツカルは左腕にエネルギーを固定化した盾を装備しているようです。実弾武器での破壊は困難とのこと」

「わずかに露出している右腕を狙おう。奴らはそこから発砲してくる筈だから、注意しながらな」

「了解」

ブラックチームは敵に捕捉されないぎりぎりの所で立ち止まり、隊長の発砲許可を待った。

「まずジャツカルから始末する。…今だ、撃て」

それに二人は銃撃で答える。

ほとんど重なって響く異なった銃声。そして肉体が倒れる音それにマホも続き、呆然としているグラントの集団にARを叩き込み、倉庫内のコヴナントを殲滅した。

「よし。後は屋根から兵舎三階窓に飛び移るぞ。奴らは銃声を聞いて一階入口からの侵入を警戒しているが、三階の窓から来るとは思っていないだろう。人類の建物は熟知していないだろうしな」

3人は倉庫屋根から兵舎の中身を偵察する。

「グラント12、ジャツカル7：エリートは数不明。三階に1」

「情報より多い。まったく、あてにならないわね…」エリカが愚痴る。

「やることは変わらない。まず三階を片付けるぞ。その次は屋上だ」マホ窘める「合図で飛べ」

その命令に二人が頷いたのを確認してからカウントを始める。

「3…2…1…行け」

窓から飛び込むと同時に、マホは窓の付近にいたジャツカルの喉笛

にナイフを突き立てる。

他の二人は隊長のカバーをしつつ、混乱しているジャツカルやグラントの集団目がけてグレネードを放り込む。

爆発し、敵の肉片が飛んでくる。そのうちのいくつかに当たりつつもマホは次の行動に移った。

怒り狂ったエリートは排除である。

マホはARを数発射撃し、その全てはエリートに着弾したが、エリートの体表に命中する直前、体に電光の様な物が走る。

情報通り、エナジーシールドによって銃弾が弾かれたのだ。

エリートは少し怯む様子を見せたものの、すぐに態勢を立て直し、手にしたプラズマライフルで反撃してきた。

たまらずマホは兵舎内の倒れた金属製の机に隠れる。プラズマが隠れた机に着弾すると、着弾地点が煙を上げて溶解したが、それだけだった。どうやら弾に実体がないため、貫通力は低いようだ。

マホは身を隠しつつ応射し、メンバーに通信を飛ばす。

『私が引きつけているうちに背後に回り込み、攻撃しろ』

二人はそれにセンサーの点滅で答えると、素早く移動し始めた。

マホがさらに引きつけるためにARのマガジンを交換しようとした瞬間、青く光る物体が弧を描きながら飛んできた。

これはグレネードだ。そう直感で判断し、素早くグレネードが付着した机から飛び出る。

どうやらあのグレネードは物体に粘着する性質のようだ。

予想通り、物体は机とその周囲3mほどを跡形もなく蒸発させた。爆発に巻き込まれはしなかったものの、遮蔽物を失ってしまい、非常に危険な状況に追い込まれた。

しかしマホは慌てることは無かった。

メンバーを信じていたからだ。

エリートの背中に叩きこまれる無数の弾丸、そして消失するシールド。

それに唸り声をあげて反撃しようとして振り向いたエリートに、す

かきずマホは背後に取りついた。

「死ね」

ナイフでエリート喉元の切り裂き、そのままエリートごとうつぶせに倒れ込むと、二発、三発と後頭部を殴りつけ、続けて頭を掴み反対側にへし折った。

いかにタフな種族であろうとこれには耐えられず、即死した。

「ようやく死んだか」ナイフを引き抜きながらマホが言う。

「厄介でしたね。しかしこんなのがここに何体いるか」

ため息をつきつつエリカがDMRのマガジンを交換する。

「よし、私とエリカはこの下の階をつぶしてくる。コウメはこの階を確保しておいてくれ。挟み込まれる前に迅速にやるぞ」

「了解。隊長、ご無事で」ショットガンを抱えながらコウメは周囲警戒に移った。

階段を静かに降りつつ、二階食堂に到着する。

「エリートが一体か。私が前に出るから、援護射撃で取り巻きを倒してくれ」

「はい。任せてください」

エリカの応答に頷きつつ、ARを抱えて飛び出る。

そのまま食堂カウンター奥のエリートに向かって突撃しつつ、途中でエリカの射撃により倒されたグラントを掴み、肉の盾にした後走る勢いのまま投げ飛ばした。

エリートは飛んできたグラントを最小限の動きで避けるが、それが致命的になった。

グラントには、上の階で倒したエリートの持っていた物体：プラスマグレネードを付着させていたのだ。

その爆発と飛散したグラントのアーマーに曝され、エリートはシールドが剥げる。

そこに取り巻きを始末し終えたエリカのDMRがエリートの頭部に命中。あつけなく死亡する。

その後も一階から増援も来たが、ほとんどがグラントだったので、

難なく殲滅できた。

この結果に満足し、コウメと合流しようとA Rのマガジンを変えた瞬間、マホはエリカの近くの空間にゆらぎの様な物を見つける。

まるで空間そのものが滲んでいるような…

そこまで考えた所で、マホは通信も忘れ、叫ぶ。

「エリカっ！ステルスだー！」

その意味を一瞬理解できなかったものの、すぐに把握したエリカはその場から素早く飛び退く。

次の瞬間、先ほどまでエリカのいた地面に、深い斬撃の後が走った。

マホは「滲んだ」場所にA Rをばら撒く。数発が透明化した敵に命中し、その姿を現した。

紅い、豪華な装飾の付いたアーマーに身を包んだエリートだ。マホはこの敵が只者ではないと一目で理解する。

紅いエリートは左腕に持ったプラズマライフルをマホに向かって発射する。

マホはそれをどうにか避けるが、A Rがプラズマ弾に被弾してしまふ。A Rは半ばから溶断され、使い物にならなくなってしまつていた。それを紅いエリートに投げつけ、マホはカウンターの後ろに隠れる。

幸いあの紅いエリートは右腕にエナジーソードを持っているため、プラズマグレネードは投げてこないようだ。

しかしこのまま隠れ続けていてはエリカが危ない。だが先ほど見た限り、あの紅いエリートは3階やこの階で倒したエリートとは桁違いに固いエナジーシールドを纏っている。ハンドガン程度ではシールドを剥がせない…

そう思っていると、足元にC字形の物体を見つけた。

これは…たしかグラントの持っていた武器だな。こいつを使ってみるか。

マホはそう決断し、グラントたちの見よう見まねでプラズマガン

構える。

紅いエリートを再度捕捉すると、思った通り今度はハンドガンで応戦しているエリカに目標を定めている。

やらせはしないとプラズマガンを連射する。不慣れな武器ながらかなりの数が命中したが、実弾武器よりはマシな程度で劇的な効果は無さそうに見えた。

このままではエリカが…マホは焦りのあまり、思わず強くトリガーを引く。すると、それまで小さかったプラズマの光球が銃口で膨れ上がり、サッカーボールほどの大きさに変化した。そのままトリガーから指を離すと、大きな光球が飛んでいき、紅いエリートに追尾しながら直撃した。

するとARやDMRにはびくともしなかつたシールドが一瞬で消失し、さらに周りの電子機器もダウンした。どうやらチャージショットのプラズマ弾は、局所的EMPパルスを発生させるようだ。

とどめとエリカがDMRでヘッドショットを決めようとしたが、敵もさるもので、咄嗟に右腕で頭を庇う。紅いエリートは右腕のソードを取り落したものの、まだやる気のように、エリカに向かってプラズマライフルを構えた。

そこでマホは一気に接近し地面に落ちたソードの柄を拾って握り込み、エナジーで出来た刀身を出力すると、一息に紅いエリートの腹部に突き刺した。

紅いエリートはそれに見開き、しかしどこか誇らしそうな表情をした後、「見事だ…人間よ…」と囁く様に言ったのちその巨体を倒れ込ませた。

「敵の持つプラズマ火器は、エリートなどの持つシールドに対し有効なようだ。特にこのピストルのチャージ弾は有効だ」

マホはしげしげとプラズマガンを眺めて言う「さあ、コウメと合流するぞ」

「わかりました。…それと、先ほどは助けていただき、ありがとうございました」

「いいや。お互い様だ」

そう言うマホはエリートの持つていたプラズマライフルを拾い、ソードとプラズマガンを大腿部にマウントする。

三階に到着したが、コウメは見当たらなかった。

「居ないのか？おい、コウメ…」

短距離通信を試みようとした瞬間、屋上から銃声が聞こえた。この音はショットガンだ。

急いで屋上への階段を登ろうとした時、エリートとともに階段を転がり落ちてくるコウメの姿が見えた。

コウメは転がりながらも三階床にエリートを下敷きにして叩きつけ、そのままショットガンをエリートの腹部に押し込み、発砲。

エリートはシールドとその下のアーマーごと腹部を撃ち抜かれると、アーマーと内臓が散弾により攪拌され、血を吐いて動かなくなる。そこに階段上からもう一体のエリートが現れ、コウメに向かってピンク色の鋭い棘状の結晶を連射する。

彼女は下敷きになったエリートの死体を盾の様に自分の上に覆い被せ、防御する。

死体に突き刺さる結晶。コウメはそれに怯えることなく、死体の脇からショットガンの銃身だけを出し、発砲する。

散弾は当たったが怯んだだけだ。マホは素早くプラズマライフルを連続して叩きこみ、散弾で弱ったシールドを剥がす。

シールドの消失とともにエリートは唸り声をあげてマホを睨みつける。

その隙にコウメは死体の下から這い出しつつショットガンの次弾をコツキングし、続けて発砲。

全身に8ゲージ・マグナムを浴びたエリートは、全身から血を吹き出しながら斃れた。

「間一髪だったな」

「隊長、ありがとうございます！」コウメが頭を下げる。

「お前もか」マホは苦笑しつつ言う「エリカにも言ったが、お互い様だ。チームはお互いをサポートするためにあるんだからな」

「所で、なんで三階の確保を命じられたのに屋上に向かったのかしら？」エリカが低い声で詰問する。

「…すみません。上から海兵隊員と思われる声が聞こえて…確認しに行った時には死亡していました。その後敵に気付かれて交戦しました」

「そうか…すまない。私が三階の確保後すぐに屋上の排除を命じていれば…」マホは後悔を滲ませた声で言う。「判断ミスだな。単純に敵の排除を優先してしまった私の」

「そんな！人質が居るといふ情報を教えてくれなかった司令部にこそ責があります。隊長は悪くありません！」

エリカが感情をあらわにしてマホを擁護するが、マホの心は晴れない。

復讐心に駆られ、助けられたかもしれない人間を見殺しにした。その事実にはマホは深く打ちのめされたのだった。

第十三話 英雄

ハーベスト奪還作戦が発令されてから五年。戦局はいよいよ大詰めに入った。

地上、宇宙戦両方で大きな被害を出しつつも、UNSCは泥沼の戦いを経てようやく奪還まで後一步の所まで来た。

宇宙ではほぼ敵艦を掃討し終えたとの情報が入ってきたが、まだ地上には相当数のコヴナント残存兵力が抵抗を続けており、今はヴィグロンド高地に墜落した空母の残骸に集結している。

残存兵力と言っても、大隊クラスの人員と機甲戦力が存在し、空母の残骸などでバリケードを張り、場合によっては疲弊したUNSC地上戦力も危ぶまれてしまう。

そこでUNSC艦隊司令部は敵がこれ以上の防衛体制を固める前に一気に攻め落とす作戦に出た。

ブラックチームは、その第一波として派遣される部隊のワートホグ偵察車両に揺られていた。

「いよいよですね、隊長」

「ああ。これが終わればようやく弔うことが出来る

弔いと言う言葉は、マホの家族やハーベスト市民だけでなく、ハーベスト戦にて死亡したSPARTANにも向けられている。

デイジーの事だ。彼女はジョンが看取った。ペリカンを守ろうとしての名誉の戦死だったという。

「…みんな、ここまでついてきてくれて感謝する」マホが頭を下げながら言う。

「気にしないでください。したくてした事なんですから。ね、エリカさん」

「そうですよ！」後方のチェーニングンの銃座に立つエリカもそれに同

調する。

「それでもだ。…ありがとう」

「見えてきました、エレファントです」コウメが前方を指し示した。

エレファント。非常に大きな履帯付き移動基地、といった趣のUNSC陸戦兵器である。

4器のチェインガンによって武装され、内部にはスコープオンMBTなどの戦闘車両を搭載できる。

このエレファントに搭乗し、海兵隊員とともに敵高射砲などの防衛設備を先んじて攻撃するのが、今回のブラックチームの任務だ。

ブラックチームは、後部ハッチからワートホグをエレファントに乗せると、簡易武器庫に向かった。

「皆、SPNKRをひとつずつ持て」マホがSPNKRロケットランチャーを指さす「火力があればあるほどいい」
「了解」

「このグレネードランチャーも貰いましょうか」

そう話していると、先ほどから遠巻きに見つめていた数人の海兵隊員がマホたちに近づいてきた。

「お、おい、あんた達が噂のスパルタンか？数人でコヴの大部隊を倒したとか、空母に潜入して中から吹っ飛ばしたとか言われてる…」

マホ達はしばし目を見合わせる。

「ええ…まあ」エリカが答える。

「ホントか！すげえ！これでハーベストからクソツタレどもを追い出せる！」

「頼むぜスパルタン！あんた達は俺たちの希望だ！」

「そうさ、英雄だ！」

海兵たちが騒ぎ立て、それにつられ集まってきた他の海兵も加わり、エレファント内の士気がにわかに上がり始める。

こういった状況に慣れていないマホ達は困惑するものの、高い士気が兵士に備わっている状態は望ましく、また最大の能力を発揮できると知っていたため、悪い気はしなかった。

「…私達を頼ってくれてを光栄に思う」マホがブラックチームを代表して発言する「しかし我々は君たちがスパルタンを頼るように君たちを頼っている。この作戦の成功は全員の奮闘にかかっている。共に戦おう」

このマホの短い演説に海兵隊員は熱狂し、また同時にこのSPARTANの為なら命を捧げよう、それは結果的に人類を守るために繋がるはずだ、と。そう決意したのだった。

マホは本人も気づかない天性のカリスマを持っていた。

「このエレファントだが」マホはエレファントドライバーに尋ねる「どれ程の装甲を持っている」

「この『マリリン』か？そうだなあ正面ならレイスのプラズマやバンシーのロッドガンぐらいならビクともしないぜ。乗り込まれたらやばいけど、あんた等がいるならその心配もいらなないしな」

「わかった。ブラック2、何か考えはあるか？」

マホたちは自分たちの素性が露見しないよう、SPARTAN以外のいる場所ではコールサインなどで呼び合うように教わっていた。

「そうですね…ここは正面装甲を頼りに敵防衛陣に突入して攪乱しつつ、搭載したスコープイオンを出撃させ、一気に高射砲を叩きます。その後は素早く岩棚の裏に後退し、爆撃を要請。残りは後続部隊に任せます」エリカが一息に自分の作戦を述べる。力任せだが、これがブラックチームを最も活かせる戦い方だ。

「よし、それで行く。ただし臨機応変にな。スコープイオンにはブラック3が乗れ。ブラック2はエレファントの護衛だ。私は遊撃しよう。海兵たちはエレファントの操縦とチェーンガンによる対空射撃に注力してくれ」その場にいる全員が首肯するのを確認し、マホは配置に付くよう命令を下した。

「さあ行くぜーマリリンー！」

高揚したドライバーの叫び声とともにエレファントが重々しく動

き始める。

エレファントはそれほど速くは無いものの、その大きさもあって途轍もない威圧感を放っていた。

「合図したら発進させろ、ブラック3」

「了解」

エレファントはずんずんと防衛陣地に突き進んでいく。

「敵射程内です。レイスの砲撃に注意」 エリカが周囲にも聞こえるよう報告する。

エリカの言った通り、前方の平原から数両のレイスがプラズマ迫撃砲を放って来た。

レイスはどれも薄汚れており、中には半壊している物もあった。やはり、敵は万全とは言えない状態のようだった。

「少し蛇行しながら進め」 マホがドライバーに指示を飛ばす。

「わかったー！」

ドライバーが短く答えると、エレファントは左右に動き始める。すると先ほどまで走っていた場所にプラズマが着弾した。半壊しているレイスは多いものの、照準器は無傷の様だ。

エレファントは蛇行しながらもレイスが砲撃をしている陣地に接近する。最早目と鼻の先だ。

「このままレイスを引き潰せ」

「よっしゃ、任せろー！」

エンジンが悲鳴を上げながらもエレファントは速度を上げて突進し、進路上の哀れなレイス三両をスクラップに変えてしまう。

何とかエレファントの突進を免れたレイスが転進してエレファントの後部を狙い打とうとするが、そこでマホの合図が飛ぶ。

「今だ、ブラック3」 マホがコウメに命令する。

「行きます」 スコーピオンの履帯が動きだし、後部ハッチから発進しつつ目前のレイスに主砲を直撃させる。もろに90mmタンクステン的高速砲を食らったレイスは、溶けた飴細工の様な有様に変貌したのち、紫の炎に包まれ爆散。

もう一両のレイスが慌ててコウメに照準を向けるが、スコープオンの12・7mm同軸機銃を剥き出しのプラズマ濃縮器に浴びせられ、直結したコンデンサの暴走により内部から搭乗員を丸焼きにして沈黙した。

「さすがだな。後一両は任せろ」

そう言うとマホは走行中のエレファントの上部に立つと、エレファントの側面に攻撃を加えようとしているレイスに飛び乗った。操縦席のハッチに手を差し込み、力任せに剥ぎ取ると、中にいたエリートにナイフを突き立てプラズマガンを奪い取り、そのまま車外に投げ捨ててから操縦席に飛び込んだ。

「レイスを奪取。エレファントの露払いをする」

「隊長、ファントムが来ました」エリカが接近するファントム降下艇をマークした。

敵は内部から乗り込んで無力化する腹積もりのようだ。

「分かった。ブラック3、ファントムに火力を集中するぞ」

スコープオンはその特殊な構造により、上向きにほぼ90°の俯角を取ることが出来る。これにより低速の飛行目標にも砲弾を命中させられるのだ。

そしてレイスは元々半重力ホバーが可能な迫撃砲。低速だが大きなプラズマ弾で、接近する飛行目標には比較的楽に狙いをつけられた。

この二両の大火力にファントムは少しの間耐えたのち、乗せていた兵員ごと空中で爆焰をまき散らした。

歓声を上げるエレファント乗員たち。しかし全てが上手く行くとはい限らない。

周囲が突如明るくなったと同時に30mほど前の地面が真っ赤に熱されたのだ。

「砲撃です。あれは…メガタレット…」エリカが上ずった声で報告する。

メガタレットとは、コヴナント地上砲台の中でも最大級の火力を持つ兵器である。

その火力は、UNSCの標準的な展開式前線基地を長距離砲撃でわずか三発で破壊してしまうほど。

さらに六分程度で再充填され、すぐに発射可能。また弾体は実体を持たないため、迎撃も不可能。

どうやらメガタレットが敵の切り札の様だ。それまではアクティブカモフラージュで光学的に隠蔽されていたため視認できなかったが、突撃するエレファントに恐れをなしたか、なりふり構わず撃ってきたのだろう。

いかに頑丈なエレファントといえど、至近弾だけで数千度のプラズマで乗員は蒸発してしまう。

次段までそう時間は無い。初弾だから外れたものの、次弾は恐らく命中する。

このままだと全滅してしまう。マホはそう考えるが、冷静に思い返すと一つの事に思い当たった。

あのファントム：兵員輸送型にしては随分と軽装甲だったな。いくら二両の砲撃でもあれほど早く落ちるにはもろすぎる。輸送型は敵の攻撃ではそう簡単に落ちないようになっていたはずだ。

そこまで考えてはつとずる。

あのファントムは観測用だったのではないか。だからあそこまで早く接近できたのだ。兵員輸送はその目的のついででしかなかった。そしてファントムが破壊されると、エレファントの内部からの制圧を諦め、やむを得ずメガタレットの砲撃が飛んできた。辻褄は一応合うと言える。

確証は無いが、今はこう考えるしかない。

やるべきことは一つ。

もう一度観測機が接近するはずだ。その観測機を乗っ取り、一気にメガタレットを制圧する。それしかない。

マホは自分の考えを仲間に伝えようと陽動を頼み、自分の考えが間違っていないことを祈りつつ観測機が来るのを待った。

やがて二分後、飛行物体を確認する。今度の観測機はバンシー攻撃機の様だ。

バンシーは上部を包むような形状の大型ハッチとブースターと飛行翼の付いた下部に挟まれるように搭乗する一風変わった攻撃機で、全長はわずか4m強ほどしかない。

これは好都合だ。マホはプラズマガンを構え、バンシーが自分の上空を通過しようとするのを確認すると、すかさずチャージショットを放った。

プラズマガンのチャージショットはバンシーに追いつき、直撃するとバンシーはEMPパルスにより制御を失い、慣性を保ったまま不時着。マホはそこへ全速力で疾走し、バンシーが再起動する前にハッチ側面に取りつく。

取りついたらとほぼ同時にバンシーは再び息を吹き返し、上昇していくが、マホはそれに振り落とされないよう突起部にしがみつきつつ、開閉スイッチを引いた。

飛行中、突如上部のハッチを開けられたエリートはなすすべもなく蹴り落とされた。

難なくバンシーを奪ったマホは機体を反転させると、ブースターをフルパワーにし、一気にメガタレットに向かう。

機体内にけたたましく通信が入ってきた。

「まだ座標を確認していないぞ」「恐れをなしたのか」「すぐに戻れ」
様々な命令や侮蔑の言葉が機内に溢れるが、高射砲は撃つてこない。狙い通り、IFFでコヴナントはこちらを味方だと認識しているようだ。

この隙を逃さずマホはバンシーから飛び降り、メガタレットに乗り込む。

内部には操作している人員だけで、守備戦力はいなかった。タレットの操作をしているエリートの背後に忍び寄り、ナイフを首筋に突き

刺し無力化すると、残りのグラント数体ををハンドガンで沈めていく。

マホは奇妙な宗教的・幾何学的なシンボルの浮かぶコンソールを操作し、逆に背後のコヴナント陣地に充填の済んだメガタレットで狙いをつける。

コンソールに警告が出るが、構わず砲撃。集結していたコヴナント防衛部隊司令部は消え去り、大きなクレーターになってしまった。

前方に気を取られていたコヴナントは完全に意識の外にあった物から攻撃され、また司令官の死亡により大混乱に陥った。

そこへ泣きつ面に蜂とばかりに到着したエレファントに前方バリケードを押し潰されると、コウメのスコープオンとエリカが回収したレイスの攻撃によりコヴナントは総崩れとなる。

エレファントは本来の役目通り兵員を展開し、最高の士気を持った海兵たちは破壊目標であった高射砲を無傷で奪取。

背を向けて逃げ出す歩兵はチェーンガンや砲撃で吹き飛ばされていく。

コヴナントは退路を作らなかったため、身を守るはずだったバリケードがそのまま棺桶になってしまったのだ。

そうこうしている間にメガタレットのコヴナントに向けた第二射が叩きこまれる。

何度かそれ繰り返すと、生きている敵の姿は見えなくなってしまうた。

ここに、第三波まで予定されていたコヴナント残存戦力一掃作戦は、たった一両のエレファントと搭載したスコープオン、数十名の海兵、そして三名のSPARTANによつてほとんど損害を出すことなく、僅か半日足らずで終結してしまった。

そしてこの戦いはSPARTANの驚異的なまでの戦闘力をUNSC将兵に広く知らしめ、ONIセクション2によるSPARTANを戦意高揚に用いる計画を押し進める一因となったのだった。

第十四話 守れない約束

ハーベストの戦いの始まりから十年。人類は必死の抵抗の甲斐なく、次々と植民星を破壊され続けていた。

地上戦では比較的互角に戦い、時には勝利することも出来た人類であったが、艦隊戦で勝利できなければ意味は無かった。結局、軌道上などの高高度からのエネルギープロジェクターにより植民星はガラス化され、地上戦の戦果に関わらず制圧されてしまうからだ。

もしコヴナントが植民星を占領したがったのなら話は違った。しかしコヴナントは占領や統治に一切の興味を示さず、ただ星々を破壊していった。これは彼らの宗教観によるもので、人類を絶滅させんとする行動原理でもあるようだ。

コヴナントは徐々にインナーコロニーへとその触手を伸ばし、五年の月日をかけて奪還したハーベストも戦略的価値を失うほど押し込まれてしまっていた。

S P A R T A N 達は確かには多大な戦果を挙げた。しかしただ地上で戦っても戦況は変えられない。そこでO N I セクション3はコヴナント高官の暗殺計画を始動する。劣勢の軍隊にありがちな計画と言えるが、うまく行けばコヴナントの指揮系統に混乱を生じさせ、場合によっては権力闘争や内乱を引き起こせる可能性もある。O N I 肝いりの計画だった。そしてこの作戦にはS P A R T A N がよく派遣されていた。

既に何件かは成功し、その倍は失敗した。成功した作戦の殆どがS P A R T A N によるもので、失敗した作戦にはS P A R T A N は参加していなかった。

最新の計画は、コヴナント上層部にのみ存在する種族「プロフェット」に対する初の暗殺計画であった。

これまでも何度か実行に移されかけたものの、非常に厳重な警護により断念されてきた対象だ。

この事から、この暗殺計画はSPARTANの中でも随一の戦闘能力を持つブラックチームに任されることとなったのだ。

「目標はプロフェット族の〈善意の大臣〉。こいつが上空のCCS級戦闘巡洋艦から降下し、将兵達に演説するところを狙えとのことだ」マホはONICクローラー内でメンバーに作戦内容を再確認させる。

従軍してから随分と時間が経った筈だが、マホ含め他のスパルタンたちも老化しているようには見えない。

これには理由がある。SPARTAN達は基本的には戦闘中以外は殆どの時間をコールドスリープをして過ごす。その上、老化による能力劣化を避けるため、薬物や遺伝子操作で老化を抑えられているためだ。兵士としてではなく、機甲戦力や兵器として数えられる、SPARTANならではの理由である。

「こいつは大量のエリート近衛に警護され、さらには頭上に多くのバンスー戦闘機とスピリット降下艇が固めている。馬鹿正直に突っ込んでは無駄死にだ。狙撃も当然対策されているだろう」マホは作戦内容の変更を通達する。

「そこで私はCCS級に目を付けた。この船のリアクターを破壊し、そのまま超質量の爆弾として大臣の脳天に叩き落とす作戦だ。ONIのデスクワーカーには思いつかないだろうな」

マホは大真面目に言い、それに二人は忍び笑いを漏らす。

「大臣とやらには馬鹿でかい墓標になるでしょうね」エリカがにやりと笑う。

「そうだ、ブラック2」エリカに向きつつ言う「おまけに下には大臣以外にも数千の兵士がいる」

「しかし、どうやってCCS級に潜入しましょうか」コウメが疑問を呈す。

「それについては考えがある。ONIから受領したこのクローラーのステルスで付近の敵前哨基地に接近し、ファントム降下艇を奪う。IFFを偽装した上で護衛団に紛れて艦内に潜入し、リアクターに

フューリー小型戦術核を設置、素早く離脱する」

「なるほど。しかしCCS級を襲撃中、艦から地上の大臣に警告を送られてしまうのでは」

「それについても大丈夫だ、ブラック3」マホはコウメに説明する「ONIから新型ジャミング装置を借りてきた。これで通信を妨害する」「といっても不審には思われるでしょうから、おおよそ30分で目的を達成しないとイケませんね」エリカが注釈する。

「そうだな。いつも通り、迅速にかつ確実に行くぞ」

その日、紫のアーマーに身を包んだコヴナント防衛隊隊長 ウスゼ・タハミーは不機嫌だった。

興味のない教義とやりに振り回され上官の不興を買い、人類への攻撃部隊から外され、指揮下の部隊もろともいけ好かないプロフェットの警護に駆り出されてしまったからだ。

もちろん、軍人としては命令に異議を唱えたりはしない。だがエリートとしては、そして肉体の強さと気高い精神を重んじるウスゼにとっては、そのどちらも備えていないプロフェットは個人的に入らなかつた。自分の身は自分で守るべきだと、身を守れもしないものに要職は過ぎたものだと言っている。

「防衛隊長…どうして儂を地上に降ろさせようとせんだ！儂の説教を無学な輩に広めよと、大祭司殿から仰せつかっているのだぞ！」善意の大臣は何度目になるかわからない文句を吐いた。

「お言葉ですが大臣殿」ウスゼはこれもまた幾度となく繰り返した反論を言う「これは艦隊司令部が決めたことです。それに私達はあなたの警護を大祭司殿から仰せつかっているのです。近頃、コヴナント高官が頻繁に暗殺されています。まして大臣殿は次期大祭司候補の一人だということではないですか。安全策を取るのは当然です」

いい加減この問答にも飽きてきた。ウスゼはCCS級のブリッジ前瞑想室で密かにため息をついた。

司令部の作戦は単純だ。

地上に降ろす大臣は本物ではなく、精巧なホログラムを用いるのだ。説教はこの艦の瞑想室で生放送し、スピーカーから流す。

ホログラムは遠距離からは判別できないほど精巧なもので、狙撃できる距離からだとは判別はまず不可能。敵がホログラムに狙撃した場合は、発射位置を割り出して爆撃すればいい。これで最も警戒すべき狙撃の対策は取れた。

後はホログラムがばれた場合だが、気づいた時点で接近している暗殺部隊は堅牢な防護に恐れをなして撤退するだろう。

堅実だが、確実な防御策であった。

それでもウスゼは警戒は絶対に解くなど地上の部下に通達している。

だが唯一の懸念はこのCCS級巡洋艦“トゥルース・アンド・アゴニイ”の腑抜けた乗員である。先ほど艦内を見回った時、グラントは当然としてもエリートまでもが気怠げだった。確かにこの艦に敵が乗り付けてくる事はあるかもしれないが、人類は突飛な戦術で幾度となくこちらに戦術的勝利を重ねてきた。油断はできない。

ウスゼは人類に対し畏敬の念を持ち、その粘り強さを称賛していた。

それ故に人類を殺害するときには出来る限りソードで、と決めていた。エリート族にとって、ソードによる死は高潔死とされているからだ。

「艦長、先ほど着艦したファントムですが、どのベイに移動しましょうか？」

“CICが怠そうに” トゥルース” 艦長に報告する。

「そうだな…第3ベイに空きが…」

「今何と言った！」ウスゼが突如激怒する。「先ほど着艦した」だと？なぜその場で判断を仰がなかった！」

あまりの剣幕にブリッジの人員に緊張が走る。

「ど、どうしたのだ隊長。それぐらいのことで」大臣までも思わず動揺する。

「大臣殿、護衛を付けますので安全な場所に避難してください。敵が侵入した可能性がありますですがご安心を。すぐに始末してまいります」

「なんだと!?!: わかった、すぐに片付けるのだ」大臣は努めて冷静にふるまった。

「おそらく敵は凄腕だ。艦長、ベイに繋がる通路のドアを封鎖しろ。ヴェゾ、リ・テ、敵を探して来い。そのムガレクゴロは入り口を固めろ」ウスゼは素早く周囲に指示を飛ばした。

「敵には優秀な指揮官がいるようだ。ばれずに終われると思ったんだがな」

帰り道のドアが一斉に閉まるのを見て、マホは軽く舌打ちする。

「フューリーは後15分足らずで起爆します。その前にここを出ないとまずいです」コウメが言う。

「ブリッジ近くには脱出艇があるようです。それをいただきましょう」エリカが提案する。

「採用だ。時間がない、一気に進むぞ。どうせほとんど一本道だ。敵はブリッジに来るとは予想してはいまい」

「コヴナント共の予想を裏切るのは最高ですね」

「全くだブラック2。さあ武器を取れ、正面突破だ。そう遠くは無い」

グラントやジャッカルではもはや足止めにもならず、次々と葬られていく。

しかしもうすぐブリッジに到着するといった所で、瞑想室前のドアを守るように立つ二人組の巨人と遭遇する。ハンターだ。

「厄介だな…ブラック2・3、右のハンターを頼む。左側は私がやる」二人からシグナルの点滅で“了解”の意を伝えられる。

二人が右側のハンターに向かうのを確認し、マホは自分が担当するハンターに意識を集中させた。

ミミズの様な生物の集合体で構成されるハンターは、正面からだど厚い装甲に破壊不可能な盾を構え、まさに難攻不落。ロケットランチャーですら数発耐えるほどだ。

しかし一方で背面は柔軟性を確保するためか装甲面積が少なく、特に腰は内部のワーム集合体そのまま露出している。ここが弱点だ。通常はそれをカバーするためにツーマンセルで行動しているが、今回はそれぞれが各個に対応するため、それも無くなった。

マホはハンターにまっすぐ接近し、ハンターに盾での打撃を誘発させた。ハンター地面に盾を叩きつけている隙にその体を一気に駆け上がると、露出している頭部に相当する部位に手をつ込み、ワームを一掴み握ると、力いっぱい引きちぎる。

そこらじゅうに飛び散るオレンジ色の体液。ハンターは悲鳴を上げて大きくよろける。その隙に背後に回り込み、艦内のウェポンラックから盗んだ4つのプラズマグレネードをまとめてハンターの腰にねじりこんだ。

ハンターはようやく悲鳴を上げるのをやめ、背後を振り返る。そしてマホを怒りに任せ右腕のアサルトキャノンで蒸発させようとした刹那、グレネードが起爆しハンターは装甲だけ残して中身は蒸発してしまった。

「流石です、隊長」

エリカたちも終わらせたようだ。体液の海に沈むもう一体のハンターを跨ぎながら向かってきた。

「もう障害は殆ど無いだろう。さあこの部屋の脱出艇に……」

「私からも称賛を送らせてもらおうぞ、人間よ」

ブラックチームは素早く声のする場所に銃口を向けた。

アクティブカモフラージュ……エリートが主に使用する工学迷彩を解きながらソードを持ったエリートが3体現れる。

「全く素晴らしい、ここまで来るとはな。予想以上だぞ人間」中央に立

つウスゼは敬意を籠めて語る「だがここで貴様らは死ぬ。しかし私が永久に記憶しておくことを誓おう」

そう言うとうスゼは愛用のエナジーソード“レイヴニング・スリヴァー”を出力した。

「来るぞ。 散開」

二人はその指示を聞くと素早く左右のエリートに攻撃を加え始めた。左右のエリートも応射するが、ハンターの死体を隠れ蓑にされてしまい、命中させられない。

マホは瞑想室への入り口傍の壁を背に立つ。中央の紫のエリートが再び姿を隠すのを確認すると、プラズマライフルを両手に一挺ずつ持ち、前方に一齐にばら撒いた。プラズマの雨に曝され、また数発が掠めてウスゼは姿を現す。しかし姿を現したときには殆どソードの範囲内だった。

そこでマホは射撃をやめ、姿勢を低くしウスゼの腹部にタックルをかまして倒れ込んだ。ウスゼは右手のソードを自分のマウントを取ったマホに突き刺そうとするが、マホはソードの持ち手を渾身の力で殴打。ウスゼはそれでもソードを手放さなかったが右腕は痺れた様で、代わりに左の拳をマホの側頭部に叩きこもうとする。

それをぎりぎりで避けたマホは、マウントポジションをやめて立ち上がり、ウスゼの左足を踏み折った。

ウスゼはそれに激昂し、折れたはずの足で立ち上がり、マホを抱え上げて壁に叩きつけた。

マホは咳込みつつ立ち上がり、ウスゼを睨みつける。ウスゼも膝立ちながらも同様にマホを睨みつけた。

膠着状態。

そんな中、艦内のモニターとドア越しからヒステリックな声が響いた。

「防衛隊長！ウスゼ・タハミー！何をしている、さっさと敵を排除するのではなかったのか！この儂に嘘をつくつもりか！」

モニターに映るのは枯れ木の様な醜悪ともいえる老人のエイリアン。プロフェットだ。

マホは地上にいるのが偽物の大臣だと理解し、しかしドア越しの瞑想室内に本物がいることを知った。

どうにか瞑想室内に押し入り、殺害すれば目的は達成される。

「大臣殿！私は安全な場所に移動しろと言ったではないか！」ウスゼが大声を上げる。

「貴様がすぐに片付けると言ったからではないか！儂のせいではない、貴様の責だ！」

「古いぼれが……」ウスゼがモニターを叩き壊す「恥ずかしいところを見せたな、人間。続けよう」

「いや、残念だがそうはいかないな」マホはウスゼから踵を返すとハンターの死体に向かって疾走し、鎧に装着されたアサルトキャノンのトリガーを引き、瞑想室への扉を破壊した。

「何だと！」

ウスゼが驚愕するのを尻目にマホは瞑想室の中に突入する。

しかしウスゼも折れた足で必死に追いつき、護衛のジャツカルを殺し、今まさに大臣も殺そうとしているマホの前に立ち塞がった。

「させん！」レイヴニング・スリヴァーを上段に構えつつ迎撃しようとするウスゼ。

マホは爆弾起爆までのタイムリミットを確認する。

残り2分47秒。

エリカたちはウスゼの連れていたエリートを片付け、後方から来る敵を押しとどめていた。

このままだと艦ごとブラックチームは死んでしまう。

大臣にも逃げ出されかねない。

マホは一つ決断する。

この戦いに勝つには犠牲を受け入れなくては。

マホはヘルメットのバイザー越しの瞳を一度閉じ、そして開くと同時にハンドガンとプラズマライフルの二挺をアキンボスタイルで構

え、眼前のウスゼに呐喊した。

ウスゼは叫び声とともにマホの正中線にソードを振り下ろした。

これは刀身に質量のないエナジーソードならではの戦い方であり、敵が振り下ろしを避けても、すぐさま横なぎに移れる振り方だった。

だがマホはウスゼの予想を超えた。

体を右側にそらしつつ左腕のプラズマライフルの銃口でソードを受け止めて押し返しつつ発砲。ウスゼはソードとプラズマ弾の干渉による高熱と閃光を至近距離で受け両目を焦がされた。

しかしそこまでだった。プラズマライフルは1発撃った後ついにマホの左肩ごとソードで切断された。

マホは凄まじい激痛に歯を食いしばりつつもウスゼが行動不能のうちには大臣に肉薄し、残った右腕のハンドガンで大臣の頭部を三度撃ち抜き、殺害した。

「隊長！いま運びます！」エリカが必死に近づいてくる。

「ブラックチーム：脱出しろ…」マホは無くなった左肩を抑えつつ言う「私はいい」

「良くないですよ…」コウメが珍しく声を荒げる「絶対に見捨てたりはしません！それにこの悪趣味な艦を自分の墓石にするなんていい趣味とは言えませんよ」

それにマホはふっと笑い、頷いた「…そう、だな。すまないが脱出艇まで運んでくれ。時間が無い」

「了解！」

こうして、ブラックチームはどうかフューリーの起爆前に離脱できた。

「見てください、隊長。コヴァントども、下敷きですよ」エリカが脱出艇を操縦しつつ「トゥルース」の爆発を確認した。

「ブラックチームの戦闘力がまた評価されちゃいますね」コウメが誇らしげに言う。

「ああ…そうだな…あの爆発は…まるで…」混濁する意識の中でマホはどうか答える。

「隊長？隊長！しっかりしてください！エリカさん、UNSCの医療施設のある惑星はあとのくらいです!？」

「クロウラーに乗り換えてジャンプして…短くても3時間。でもスリープポッドまで隊長を運べばどうにかなるはずよ!」

「隊長！頑張ってください!」

「そんな…隊長!」

二人の必死な声が、マホにはどこか遠くに聞こえる。

まるで…そうだ、思い出した…ハーベスの新年祝いの祭りの花火だ…はぐれたみほを叱って…その後手をつないで一緒に…

その時みほと約束した。『もう二度と離ればなれにならない』と…

どうしてこんな大切なことを忘れていたんだ…

わたしは…あねとしてとうぜんのができなかった…

やくそくをまもれなかった…

すまなかった…みほ